

ガイアセイバーズ —水
にふれる闇、闇をとか
す水—

独楽 悠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「お前のこと好きになったかもしれねえ。男相手つて初めてだけど」

エリート官僚の息が多く通う名門高校でただ一人“不良”のレットルを貼られ、浮いた存在でいた宮島 影斗。卒業年を迎えた春、高等部に入學してきた美少年に半ばひと目惚れし、流れて告白までしてしまう。“女好き”で通っていたはずなのに、どんどん彼にのめり込んでいき――

初稿『ガイアセイバーズ（無印）』、第二稿『海の妖』からさかのぼること4年、影斗と蒼矢の出会いの話。

※高校生の日常ものです。ヒーローものではありません。

◆完結しました（2021/7/21）

◆注意事項（下記ご心配な方は作品閲覧をお控え下さい）

- ・ 一部年齢制限表現有（ほぼ無制限ですが一応R15・各話タイトルで判別可能です）
- ・ 物語の舞台は初稿『ガイアセイバーズ —G A I A S A V E R S—』および第二稿『海の妖』の4年前になっており、登場人物は被っていますが設定上の関連性はほぼありません。初稿，第二稿を読んでいなくても問題ない内容です（当該2作品はR18ですので、お読みの際はご注意ください）

目次

導入

登場人物

本編

第1話 | 名門校の不良(ワル)

4

第2話 | 艶やかな新入生

12

第3話 | 巻き込み型マイペース

21

第4話 | 二度目ましての告白

28

第5話 | バイクが呼び寄せた出会い

36

第6話 | 伶俐な頭にのぼる熱

43

第7話 | 膨らむ慕情

52

第8話 | 顔合わせた三人

59

第9話 | 外界へのいざない

69

第10話 | 遊び人の庭

75

第11話 | 指導者からの干渉

84

第12話 | 無自覚に及ぶ余波

95

第13話 | 少なからぬ心の揺れ

103

第14話 | 踏み出す一歩

111

第15話 | しのび寄る不穩

120

第16話 | 牙を向く夜の街

125

第17話 | 闇色の烈火(R15)

134

第18話 | 背にかかると後悔 | 142

第19話 | 小さくも、大きな存在

148

第20話 | 確かになる絆 | 155

最終話 | そして、今。 | 163

導入

登場人物

※1作品目『ガイアセイバーズ ―G A I A S A V E R S―』から約四年前の時点でのスペックです。

宮島 影斗（ミヤジマ エイト）

17歳（4月時点で17歳8箇月）

178cm

備考：実家は不動産屋（ほぼ帰っておらず、友人宅やネカフェで寝泊まり） 姉一人

?城 蒼矢(タカシロ ソウヤ)

15歳(4月時点で15歳2箇月)

162cm

備考：父親は中央省庁官僚 一人っ子

花房 烈(ハナブサ レツ)

15歳(4月時点で15歳10箇月)

173cm

備考：実家は酒屋 一人っ子

鹿野（カノ）※苗字のみ

30歳 高校教諭（化学）

177cm

備考：実家は地方（一人暮らし中） 独身・彼女無し

本編

第1話―名門校の不良（ワル）

某日某N区。

小雨が降り注ぐ中を雑踏に紛れて男が一人、N駅改札出口から離れていく。

華奢な体躯とすらりと伸びた手足に似合う、お決まりのジャケットに細身のパンツ姿で、傘を片手に少し進んで一旦歩道の端で止まってから、携帯を耳に寄せる。

「――先輩、駅に着いたんですが……」

『おう、たった今スマホに店名と地図送ったから、辿り着いて来い』

「わかりました」

『懐かしいだろ、その近辺。初めてお前と遊んだとこだよな』

「……そうですね……あまり良い思い出ではないですけど」

そう返しつつ、男は辺りの景色を見回した。雨曇りの中、周囲はいつもより暗くなるのが早く、居酒屋やダイニングバーの看板が雨に濡れながら煌々とした光を放っていた。

『今のお前にとつちやあ、さほど危なくもねえだろ？』

「……まあ。でもやっぱり苦手ですね。早くお店に着きたいです」

『おー、こつちも楽しみに待ってるよ、お前のこと』

「近くなったらまた連絡します」

『了解』

約四年前…

都内某S区に位置するT大付属高等学校へ、一台のバイク音が近付く。

学校敷地内に入る直前、裏門近くに店を構える定食屋の駐車スペースへ滑り込み、門から丁度死角になるところにバイクを止め、黒ずくめの男が緩慢な動作でバイクスーツを脱ぐ。

ジャケツトの下から現れた制服は目の前の学校のものらしく、裏門を迂回して慣れた所作で脇から滑り込み、手ぶらのまま敷地内へと入っていった。

構内の外れに位置する化学準備室内で、白衣にスーツ姿の教員らしき男が、劇薬入りのガラス瓶がずらりとひしめく薬棚を目の前にゆったりと腰かけ、淹れたてのコーヒーを優雅にすすっていた。

早朝のこの静かなルーティーンを大事にしている彼だったが、にわかに準備室の引き戸が開き、至高のひとつ時は終了する。

「ふあくあ」

頭を掻きながら大きくあくびをし、部屋に侵入してきた先ほどのバイク男は教諭の前を通り過ぎると窓際の椅子へどかっと座り、ひとつ伸びをしてから肘掛けに腕をもたれた。

「めずらしー。始業前なのにもう来たの？」

カップを置くと、教諭は脚を組んで男へ声をかける。

「んー、特に意味ねえけど。泊まり先朝帰りから直行しただけ」

「…よくやる高校生だこと。今年入って何回目？」

呆れた風息をつく教諭だったが、にじみ出る好奇心は口元の緩みを隠しきれなかった。

短めの細眉に、高校生という立場にしては派手なスタイルの黒髪に片耳のピアス、着崩した制服の胸元に二連ネックレスという出で立ちのその男子生徒は、視線を合わさなのまま、他人事のように興味無き気な表情をする。

「…もうしばらくねえよ。今朝切れた」

「え。最近楽しそうにしてたじゃん。なんでまた」

「まあ色々」

「……」

投げやりに見えるその言動に、教諭は頼杖をつき、眉を少しひそめた。

「…君さあ、もう少し相手選んで付き合ったら？ 年相応のさ」

「んー…」

「他人の恋愛事情をとやかく言うつもりないんだけどね。…君には年下の子も合うと思うんだ」

教諭の口上をぼんやりと聞いていた男子生徒だったが、急ににやりと笑う。

「鹿野^{カノ}ちゃん、誰か紹介してよ。同窓生とか」

「…悪いけど、僕友人関係は大事にしたいから」

「…けーち。そんなだから彼女できねえんだよ」

「放つといて。…ちよつと宮島、ここ煙草禁止だからね！ 化学準備室^ゴでヤニ臭いとか、

僕の首飛ぶだけじゃ済まなくなるんだからね！」

「…わーつてるつて…」

気分に乗じて口にくわえかけた煙草をケースに戻し、宮島^{ミヤジマ} 影斗^{エイト}は大きくため息をついた。

”鹿野”と呼ばれた教諭は、影斗の前にコーヒーを置き、同時に一枚のコピー用紙を差し出した。

「ねえ、せつかく早くから学校来てるんだしき、コレ出ていかない？」

「…入学式…新入生歓迎式典？」

差し出された用紙を受け取り、影斗はさらっと目を通し始める。

「つへー、今日ってそんな日だったんだ」

「そうなんだよ。君ももう最上級生だよ？ …在学中に一度くらい出席してみたら？

記念にさ」

「…自分のもまともに出てねえのに？」

ぶつと噴き出すと、ひらりと用紙を鹿野へ投げ返す。鹿野は慌てて手を差し伸べ、白刃取りするように受け止めた。

「こんなん、俺出たって邪魔になるだけじゃん」

「そんなことないって。君同級生とすら疎遠じゃない？ 最後の一年くらい、他の子と関わってみなよ。後輩も含めてさ」

「手塩かけて育てた良い子ちゃんが、不良になっちゃうよ？」

「僕は君と話してて楽しいけどな。ずっと年下なのに僕がやってない事沢山経験してるし、すごく興味深いよ」

「……」

歳不相応に無邪気な笑顔を向けてくる化学教諭に、影斗は少し照れを隠すように鼻で息をついた。

「いや本当にね、今日は是非出席してくべきだと思ふのよ。ちよつと例年と違つて、面白いことになつてるんだ。面白いつても、教諭陣の間でだけなんだけどね」

そういうと、鹿野は椅子ごと影斗に接近し、先ほどの用紙を指差しながら影斗に見せる。

「新入生挨拶…」

「そう、注目は新入生代表の挨拶。ここはいつもは高等部一年の内部生があてられるんだけど、今年は異例で外部生が選出されてるんだ」

「…内部生つて、中学からの持ち上がり奴らだけ？」

「そうそう、うちの学校大体内部生だけど、毎年一割くらいは入試から採つてるんだよね。…君は外部生だったよね！」

「…まあ」

そういういきさつから外部生の優秀さが解つている鹿野は、冷めた顔をする影斗ににこりと笑う。

「代表に選ばれるような子は、進学考査でトップだったり中等部で生徒会役員だったりするし、僕ら高等部の教員や式運営委員にも気心が知れてるから何かとスムーズなんだよね。」

…ただ今年は、外部入試で歴代トップと並ぶスコアを取つて、内申も優秀な成績を修

めている外部生がいたとかで、例外的にその子にやらせてみようってことになつたらしいんだ」

興味なさげな視線を送る影斗だったが、鹿野は嬉々として一方的にしゃべり続ける。「何しろ慣例に沿わないことだから、古参の先生方の間では賛否あるみたいだけど…、内部生にも一部にリークされちゃって、今校内でも噂になりつつあるね。なんにせよ、みんな興味津々なんだ。」

しかもさ、僕も式のリハーサルに來た彼を一度見かけたんだけど——」

と、鹿野が興奮気味にトーンアップしたところで、準備室のドアが開かれ、影斗がぬるっと退室する。

「って、興味0!?! ちよつと、式は—!?!」

「どーでもいいよ、そんなの。俺今更学校こくに浸かるつもりねえし。∴教諭陣あつちだつてそう思つてるでしょ」

慌てて呼び止める鹿野へ振り返り、影斗はにやつと笑つてみせた。

「コーヒークッそさん」

そう一言だけ言い残し、準備室のドアが閉じられる。そのままあつさりドアから人影が消えると、腰を浮かしかけた姿勢で止まっていた鹿野は一気に脱力し、がくりと椅子に身体を落とした。

「もく…、…失敗」

第2話 艶やかな新入生

化学準備室を後にした影斗は、さつき通つたばかりの道をぶらぶらと逆に歩き、元来た裏門へ向かつていた。

胸ポケットから煙草とライターを引き抜くと、旨そうに一服目を味わい、上空へと煙を吐き出す。

父親の指示で無理やり入学させられたこの国立高校には全く愛着が無く、高等部三年目という最終学年を迎えた現時点で、始業から放課までまともに通つた日数は数えるほどしかなかった。基本教諭陣は敵だったが、鹿野のように懇意にしている教員もわずかながらいて、彼らの授業にはそれなりに出席しているものの内容は面白くないので、寝るか漫画を読んで過ごしていた。校内に友人と呼べる生徒はおらず、遊び相手は繁華街をふらついている時に偶然仲良くなった、本名もまとも知らない他校生ばかりだ。中学生の頃からバイクに興味を持ちだし、やがて二輪免許を取得・念願の一台目を購入して以降は、学校への興味を完全に失っていった。

今の影斗を学校につなぎ止めているものは、鹿野を始めとする影斗に興味を持つ教員との関係性だけだった。

裏門にさしかかったところで、隅に連なる桜の木々の下で記念撮影に興じている人波が目についた。

影斗は反射的に彼らの視界から外れるように迂回し、鉢合わせにならないように裏門を目指す。

…面倒くせえけど、見られたら後で絶対呼び出し喰らうからな…

天敵の風紀委員顧問の顔を脳裏に浮かべつつ、煙草を携帯灰皿へ押しつけたところである。

「…」

桜をバックにしきりにシャッターを切る鳥合の衆と影斗の間を、生徒が一人通り過ぎた。

もちろん影斗には気付かず、そのまま平行して突っ切るように逆方向へスタスタと歩き去っていく。

影斗は目を見開いたままその生徒の姿を追い、振り返った姿で固まり、徐々に小さくなっていく後ろ姿を凝視する。

影斗はしばらく立ち尽くしていたが…次の瞬間、柄にもなく駆けだしていた。

「——おい」

背後から呼び掛けられ、事務棟へ入りかけていた件の生徒が振り返った。

声を掛けるまでに幾分か呼吸と整えていた影斗は、立ち止まった彼にニツと笑いかけ、ゆっくり近付いていく。

「えーと……お前、新入生？」

「……はい」

振り返ったその生徒の顔をはつきりと確認し……影斗は再び固まって——否、見惚れてしまった。

……これほどの美人に、男女含めて今までに出会ったことがあつただろうか。

制服を着ていてかろうじて”男子”だと認識できるくらいで、声色を聞かなければ”

男装している女子”と間違われても文句は言えないだろう。

透き通るような白い肌に、形の整った小さめの唇。さらさらと風に流れる焦茶の髪と、その間からのぞく涼やかな目元。長い睫毛の奥にある薄茶色の大きな瞳が印象的だった。

「あの……何か？」

双方見合つたまま少し沈黙し……怪訝な面持ちになる彼に声をかけられて影斗は我に返り、すぐに笑つてとりなす。

「ああ、いや。……ちよつと聞きたいことがあつてさ」

「はい、何でしょうか」

本当のところは別段用は無い。ただ、呼び止めて顔を正面からちゃんと見てみたかっただけなのだが——ふいに、影斗の頭の中に邪な憶測がよぎる。

…ここは、男子校なのだ。

勘の鋭い影斗は、視線や仕草、言葉遣いでその人間の趣味嗜好がなんとなくわかる方だ。

在校生との絡みは薄くとも、この中高一貫の男子校にそういう方面の生徒が一定数いて、女子がいらないならではの”男子の園”がいくつも作り上げられていることを知っている。

それを踏まえて、影斗は目の前の可愛らしい彼がここにいて理由を推測した。

これほど人目を惹くビジュアルなら、これまでの二年間で間違いなく存在に気付いているはずなので、恐らく外部生なのだろう。つまり、”男子校”を選んで入学してきている。

一見、そういう趣味があるようには見えないが——逆に、女に飢えた男子生徒を狙って入学してきた可能性もある。そういう、これまた男子校ならではのハーレムも現に存在する。

「お前さ…彼女とか、いる？」

「!? ついえ…、いません」

唐突過ぎる質問に、男子生徒は動揺しながらも正直に返答する。

予想通りの回答に、影斗は内でほくそ笑む。…大事なのは、次の質問だ。

「じゃあさ、彼氏は？」

すると、恥ずかしげに下を向いていた男子生徒の目がわずかに見開かれ、一瞬動きが止まる。

ついでぐるつと踵を返し、元々向かおうとしていた事務棟へ足早に歩を進め始めた。

——えっ。

「…っおい、待てよ」

急な予想外の行動に、影斗はあわてて追い、彼の前に回り込む。

「どいて下さい。もうあなたと話すことはありません」

そう言いながら自分を見上げる彼の表情に、影斗はまたしても釘付けになってしまった。

大きな眼鏡をかけ、ネクタイをきっちり締めたいかにもな真面目風で、ぎりぎり160cmあるかないかくらいの小柄男子が、180cm近い上背の不良体へ真正面から睨み上げてくるのだ。

口元は真一文字に結ばれ、幼さの残る面立ちから不釣り合いな鋭い眼光が注がれる。

「……悪かった。変な質問した」

少し間をおいて、影斗は素直に謝る。態度には出さないようにしたが、内心彼の劍幕に圧倒されていた。

「…怒った？」

「当たり前じゃないですか…！ 初対面でする質問にしては、失礼過ぎます。…通して下さい」

「聞けつて。失礼だったかもしれないけど、からかつたつもりはねえんだ」

「じゃあ、どういふつもりだったんですか？」

脇を通り抜けようとする自分をなだめる影斗を、男子生徒はなおも眉をいからせて見上げてくる。

「…興味、が湧いたから」

「……」

少し口元を緩ませ、緊張感に欠ける表情を浮かべながらそう答える影斗を見、怒気が冷めてしまったのか彼は息をつき、視線を外す。

彼の動きが止まったのを確認し、影斗は改めて声を掛けた。

「俺、三年の宮島 影斗。…お前は？」

「…？ 城タカシロ 蒼矢ソウヤです」

「……………」

影斗は、ついさつき鹿野に見せられた今日の式典プログラムを思い出す。

鹿野が目玉と言った『新入生代表の挨拶』脇に、小さく手書きで書かれていた名前。

同姓同名はそういない。目の前にいる彼が、”例外の外部生”なのだ。

…成程ね…

「——もう行つていいですか？」

「！…ん、ああ」

そう男子生徒——蒼矢から小さく声をかけられ、ややうわの空になっていた影斗ははたとして道を譲る。

その時には既に蒼矢の表情からは怒りが消え…静かながらも、内の不快感を表したような視線を影斗へ送っていた。

「…っ……………!!」

全く好意的でないその上目遣いの二重に、影斗はぞくつとするほどの色気を感じた。

影斗は今まで抱いたことのないほどの興奮に駆られていた。高揚を抑えきれず、どんな顔が熱くなつていく。

…なんだこいつ…！ さつきつから、ビジュアルから全然想像つかない顔つきしやがる…

…おもしれえ…!!

前を開けられると、蒼矢は影斗から視線を外し、黙ったまま歩き出す。

「——おい——」

数歩行ったところで影斗は呼び止め、蒼矢は少し振り返る。

「…代表挨拶、すんだろ。頑張れよ」

「……!?」

その物言いに、冷ややかだった蒼矢の目が大きく見開かれ、驚愕の表情に変わって向き直る。

「…っなんでそれを…」

それには答えず影斗はニツと笑い、蒼矢に近付くと固まったままのその肩に手を置く。そして空いてる方の手で彼の眼鏡を外し、顔にそつと唇を寄せた。

「——」。

完全に動けなくなった蒼矢の胸ポケットに眼鏡を差し込むと、影斗は肩をポンポンと叩いて離れていく。

「またな、蒼矢」

軽く手を振りながら、ささつと視界から小さくなっていく影斗の背中を、蒼矢は呆然と眺めていた。

「……なんだ、あの人……」

頬に手を当て、そう小さく呟いた。

第3話 | 巻き込み型マイペース

次の日も、影斗は始業だいぶ前から登校した。ルートはいつも通り敷地内の端を伝っていたが、足取りはいつもより軽やかに、化学準備室へ向かう。

「おや！ 今日も早いんだねえ。優秀優秀」

「鹿野ちゃんさあ、何時に来てんの？ ここ泊まってんの？」

「まさか。でも、ここがセカンドハウスなのは間違いないね。僕、毎朝五分で家出てるから。モーニングルーティーンはここから始まりますね」

鹿野は影斗の前にコーヒーを置き、にやにやしながら頬杖をつく。

「…君さあ、昨日の式見てたでしょ」

「ああ」

一口飲んでから、影斗は別段気にする風もなく返答する。

「俺、見えてた？」

「多分気付いてたの僕だけだけどね。他の先生は気付かなくても、僕の目はごまかせませんよ？」

「いや、ごまかしてたつもりはねえんだけど…」

影斗は自分のビジュアルを鑑みた上にネクタイも手元になかったため参列は諦め、式の行われる講堂へ先じて侵入し、二階席の端から眺めていたのだ。

自分の意に反して言い訳がましくなってくるので、それ以上は言い返さなかった。

「新入生の挨拶見た？　なんか凄かったよねえ！　異様な雰囲気だったよ、保護者席のざわつき具合がハンパなかったね」

鹿野は興奮を抑えきれないといった風に語り続ける。

「いつもなら本番に近い状態でみっちり練習するところを、数日前のリハー一回だけのほぼぶっつけだったのに、落ち着いてたよね。所作も完璧過ぎて、僕彼のダブルスコアなのに思わず尊敬しそうになっちゃったよ」

「だな。俺もすげえと思ったよ」

「…あとさあ…彼、すっごい美人だよ。君みたいなイケメンって感じではないんだけど、なんか性別がわかんなくなっちゃうくらい綺麗なんだよねえ。リハで見た段階で、僕見惚れちゃってさあ。…生徒達みんな湧き立ってたよね」

「ああ、あのレベルは女でもそうはいねえな」

素直に頷く影斗を見、鹿野は何かを察したようだ。

「…もしかして——興味持っちゃった？」

「んー。まあそんなとこ」

「えっ」

からかい半分のもりだったのに予想外の返答をしてきた影斗に、鹿野は目を丸くする。

「…一応聞くけど、式見てたのって…彼目当てだったの?」

「ああ。式の前に会って話したからさ。ついでに見とこうかと思つて」

鹿野は、普段らしくない彼の行動に意表を突かれていたが、それよりも更に…そう話す影斗の表情に注視せざるを得なかった。平静さを保ちつつ、改めてゆっくり質問する。

「…宮島…それってさ、ただの興味なんだよね? …恋愛対象とかじゃないよね?」

「んー…わかんねえけど、いづれそうなるかも」

影斗は少し考えるそぶりを見せ、けろつと言つてのけた。

「え、っ!? だって…男の子だよ!」

そう返しつつも、鹿野は自分が核心をつけていることが解っていた。今日の影斗の機嫌の良さと、話していた声色のトーンや表情が、新しい彼女を作った時のそれと酷似していたからだ。

とは言え、年下の…しかも男子相手に恋愛感情など、百戦錬磨の”女好き”で通つている彼に湧くものだったのだろうか。

「君…女の子専門じゃなかったの？」

「関係ねえよ。俺が会って触りてえとかやりてえとか思った相手はたまたま今まで女だったってだけで、それが今回は男だったってだけ。元々その辺あんまりこだわりねえのよ」

「!? ヤ……!?」

二の句が継げなくなってしまうた鹿野に、影斗はにやりと笑ってみせる。

「…まあでも、やっぱり今回は例外かもな。いつもよりだいぶ純粹」

「? それってどういう——」

「つと、そろそろ行くわー」

「どこに!?」

「迎えだよ、蒼矢の。出待ちならぬ来待ちっ」

そう言い残すと、影斗はコーヒーをぐいっと飲み干して鹿野の前にカップを置くと、さっさと化学準備室を出ていった。

残された鹿野は、黙ったまましばらくドアの方を眺めていたが…身体を振り返し、頭到手櫛を入れた。

「え…いや、ちよつと待ってよ…、問題児なんだから、これ以上問題増やささないでよお…」

早朝のT大付属校正門に、ちらほらと在校生が足を踏み入れる姿が見えてくる。その一人である蒼矢も、登校二日目を迎え、昨日と同じように事務棟へと向かっていった。

「蒼矢っ」

と、前後に人が見えなくなつたところで、真横から声をかけられる。蒼矢は一瞬足を止めかけたが、その聴き覚えのある軽いトーンに、そのままノールックで通り過ぎた。

声をかけた影斗は彼を追い、すぐ隣に付いた。

「おい、こつち向けて。せつかく迎えに来たんだから、絡めよ」

「…おはようございます」

「つれねえな」

依然顔をそむけたままの蒼矢の前に出ると、影斗は彼の顔を窺うように首を傾げながら後ろ歩きし始める。

「なあ、昨日のどうだった？」

「何のことですか」

「キスだよ。一応遠慮して、口の横にしといたんだけど」

「——思い出させないで下さい!!」

立ち止まって少し声を荒げ、蒼矢はようやく影斗に顔を向けた。顔を赤らめ、眼鏡の奥から恨みがましい視線を返す。

「困るんです、昨日のも…今のも。…あなたは面白いかもしれませんが、俺は——」

「名前で呼べよ。昨日言ったじゃん」

「っ?」

そう、きよとんとした顔で返す影斗に、自分の主張を絞り出していた蒼矢は面食らうが…すぐに頭の片隅に残しておいた目の前の不良体のフルネームを思い出す。

「…宮島先輩」

「下の名前で呼んでくれなきゃ、聞かない」

「……!?!」

そう言い捨て、ふいっと横を向く影斗に、蒼矢はいよいよ動揺する。が、やがて下向き加減に目を伏せ、ぼつりと口を開いた。

「…影斗…先輩」

そのか細い声を聞き、影斗は満足気にニッコリ笑う。

「昨日と言えば…挨拶、良かったぜ」

「…ありがとうございます。何で俺だって知ってたんですか? プログラムに載ってなかったのに…」

「ああ、…特別な情報ルートがあつてな…ほぼほぼ偶然だよ。…なんかお前、すげーんだって?」 挨拶あはれやる奴は優秀なんだって、センセ教員に聞いたぜ」

「! …そんなこと…ないです」

「そうなんか? …まあ、なにはともあれお疲れさん」

特別な意図もなく軽々とリーク情報をしゃべっていたが、蒼矢の表情が何となくぎこちなくなり、うつむいてしまったので、影斗は適当に話を切り上げておく。

と、視界に出勤してきた教員の姿が見え…影斗は素早く蒼矢から距離を置いた。

「じゃ、俺行くな。お前も用あんだろ? 足止めして悪かったな」

「いえ…? 先輩はどこへ行くんですか?」

明らかに教室棟じゃない方向へと歩き始める影斗を見て、蒼矢は素朴な疑問を投げかける。

「まあまあ。じゃ、またあとでな」

「……」

適当に濁して去っていく影斗の背中を見送り、蒼矢は気を取り直して、事務棟へと入っていった。

第4話「二度目ましての告白」

午前の授業が滞りなく終わり、お昼の時間を迎える。

なんとなく浮つきだすような、にわかに騒がしくなる周囲の中、蒼矢は席に座ったまま通学バッグからコンビニの袋と文庫本を引っ張り出し、パンとおにぎりを机に転がす。そのまま本を開き、おにぎりを片手に読書にいそしみ始めた。

同時に、教室外に他クラス・他学年生徒の人だかりが出来始める。お昼休みということでフリーで動き回れるようになり、昨日の式で会場を席卷した蒼矢を見に来ているのだ。もちろんクラス内にも同じような視線があり、彼を昼食に誘おうとする動きを見せた同級生も何人かいたが、声を掛ける前に当人がひとりご飯を始めてしまったのでタイミングを逸し、遠巻きに様子をうかがうまでにとどまっていた。湧き立っているのはおむね内部生だけではあるが、なにしろ在校生の九割近くに上るため、今いる周囲のほとんどが蒼矢に注目していると言ってもいい状況だった。

式での所作もさることながら、人目を惹くその容姿も当然放っておかれるはずはなく、中には彼を値踏みするように小声で何事かを話しながら眺めている輩も数多くいた。

そんな彼らを気にとめる風もなく、蒼矢はただ本へと目を落とす、相性の悪い牛乳でおにぎりを喉の奥へ流し込んでいた。

——そんな中、一人の生徒が廊下で停滞している人波をかき分けながらまっすぐ当該教室へ向かい、躊躇なく室内へ入っていく。その生徒の姿かたち、更に教室内外がざわめいた。

「よう」

「…… 影斗先輩」

意識を本に集中させていた蒼矢は、弾かれたように顔をあげる。影斗が至近距離に立って目の前に人影が出来ても気づけなかったようで、ふいに声をかけられ目を丸くしながら彼を見上げた。

突然の来訪にやや動揺している蒼矢を尻目に、影斗は眉を寄せて机の上のパンを手にとった。

「…お前、シケた飯食ってんな… ちょっと来い」

「っ、えっ」

そう言うのと、影斗は蒼矢の腕を引っ張り上げ、戸惑う彼を引きずるように教室外へ連れ出した。

二人の様子を見ていた周囲の生徒達はその急展開に蒼矢と同じく動揺し、ドアを開け

て出てきた二人に譲るように道を造っていく。

「ちよ、先輩…何…」

「まあ任せとけて、いいトコ連れてってやるから」

二人の姿はあつという間にフロアから消える。

残されたギャラリーは目的を失い、変な空気に包まれていた。

「…今の…宮島さん、だよな？」

「…うん。 …あの人、男もイケたの？」

「…わかんないけど…そうだとしたら勝ち目なくね？ 顔面完敗してるじゃん…」

「だな。…マジかよ」

影斗は蒼矢を連れ、一学年の教室棟から外に出る。しばらく歩いて行き着いた先は、学校敷地内の片隅にある温室だった。

温室内には作付けを待つ野菜の苗が並べられ、それらを横目に中を進み、コーナーに据え付けられた木製のテーブル一式に蒼矢を座らせた。

「ここ、俺のお気に入り場所。今の時期が一番最高だな、適当に温かいし、空気も良いし。冬はそのプレハブ小屋の中にストーブ置いてあるから、そっちで食ってる。夏はパソ室。あとはまあ…化学準備室とか」

影斗は手に持っていた蒼矢のお昼ご飯であるパンを投げて超越す。受け取った蒼矢は、かろうじて持つてきていた紙パックの牛乳をテーブルに置き、小さくため息をついた。

「いいだろ、ここ。絶対飯も美味しく感じるから」

「…そうですね。でも、あまりに急過ぎて、ついていけません」

頬杖をつけて笑いかけてくる影斗に、蒼矢は少しむっとした表情で見返した。

影斗は、諦めてパンをかじりだす蒼矢を改めて観察し始める。

相変わらず、容姿のどこを取っても今までに見えないレベルで美麗なのだが、初対面の時から伝わってくる野暮つたい雰囲気はやはり変わらなかつた。制服はきっちり着ているが、成長を見越してかややサイズが合っておらず、代表挨拶という大役を任せられたにもかかわらず、直近で髪を切り揃えた形跡が無い。そして影斗が何よりも目ざわりに思ったのが、端正な顔に乗っかっている大きな眼鏡だ。何故このビジュアルを持ってして、コンタクトにしないのか。

自分の容姿に絶大な自信を持つ影斗は、蒼矢のこの形なりに理解が出来なかつた。

結論付けるとしたら…おそらく影斗とは、考え方が根本的に違うのだ。

真顔で牛乳を飲んでいる蒼矢に声をかける。

「…蒼矢さあ、俺昨日お前に興味湧いたって言ったじゃん？ あれ、お前の顔への興味つ

て意味だったらどう？ 嫌なの？」

唐突な影斗の質問に、蒼矢は少し目を見開いて：視線をテーブルに落としたりした。

「…嫌です」

「…うん、OK OK 良かった」

その重い表情に、影斗は軽い調子で笑い返した。それきり少し二人の間に沈黙が流れ、蒼矢はうつむいたまま牛乳を口に運ぶ。

影斗はその均整の取れた横顔を見つめ、ぼそりと口を開いた。

「…背え伸ばしたいのか？」

「……」

蒼矢は影斗を横目で見：頬を少し赤らめて、小さく頷いた。

「…そっか」

影斗の中で彼なりに合点がいく。そしてそのまま黙って、柔らかな視線で蒼矢を見守った。

あと数分で予鈴が鳴るといところで影斗は席を立つ。

「そろそろ行くかー」

続いて席を立ちあがった蒼矢の背中に手を置き、温室入口へと促した。外へ出ると、

影斗は一旦足を止めた。蒼矢が軽く振り返る。

「…あのさ蒼矢、さっきの意味、本当だから」

「? さっきのって…」

「お前の顔に興味湧いた」ってこと」

「…!」

「だつてお前綺麗なんでもん。お前はそう思われるの嫌かもしれねえけど、俺の正直な感想な。あ、あとお前のこと好きになったかもしれねえってことも言つとくわ」

「……!?!」

たて続けに伝えられる中で唐突に混じる影斗の”告白”に、曇りかけていた蒼矢の顔が驚愕に変わる。

戸惑ったような表情で見上げてくる彼へ、影斗は構わず続けた。

「…こういうこと隠しときたくねえし、どうせ態度に出ちまうから今のうちに伝えとくわ。まあまだ俺の中でも保留にしときたいんだけどなー。男相手って初めてだし」

拒絶されるかもしれない。でも…こいつとは、手の内明かしたうえで関係を続けていきたい。

口調に軽さを残しつつもふざけた調子を出さないよう、率直な思いを伝えた。

「…お前のこともつと知りたいと思つてる。外見だけじゃなくてさ。最初はそりや見た

目から入ったけど、今は中身の方がすげえ興味ある。」

「……」

「もちろん、お前も俺のこと何でも聞いてきていいぜ。ハマってることとか趣味とか…あ、スリーサイズとか性癖とかでももちろんOK。なんなら今までのオンナの遍歴も——」

「……いいですつ、そういうのは…!!」

話があらぬ方向に行きそうになり、蒼矢は顔を少し紅潮させながら拒む。

影斗はそんな彼の態度に脈を感じていた。白けて軽蔑される可能性もあったがそこまでではなく、表情や挙動は拒絶している風ではあるが、嫌われてはいなさそうに見えた。

頬を染めてうつむく彼に、影斗は最後の一押しをかける。

「俺のことはこれからゆっくり知ってくればいいよ。絶対がっかりさせねえから」

「……」

「…また会って話してもいいか？」

横から顔をのぞき込む影斗に、蒼矢は返答しかねるように沈黙した後…小さく頷いた。

「……はい」

影斗は満足そうにニツと笑う。

「明日もここな。迎えに行くから」

「!? いっ、いいです…!!」

「良いの?」

「っ遠慮します!! ひとりで来れますから…!!」

「冗談だよ。了解!」

第5話「バイクが呼び寄せた出会い

その日の午後を適当に済ませ、結果的に久々に全授業に出席した影斗は、どことなく満ち足りたような表情でバイクを走らせていた。

そして今日泊まる友人宅から最寄り駅近くのコンビニに停め、夕飯と嗜好品を調達する。買い物を終えて出てきたところで、何かに気がつき足を止めた。

…なんだあいつ。

自分のバイクの横つ面にどっかりと胡坐をかき、じつと眺めている高校生らしき男子。

その奇妙な姿に、コンビニを出入りする何人かも、その彼を横目にしながら通り過ぎている。

その場につつ立ち、影斗はしばらく思索した後、彼に気取られないように近付いていった。

「俺のバイクに何か用？」

後ろから声をかけられ、男子高生はパツと振り返る。驚いたのか目を丸くして、少し離れて立つ影斗を見上げた。

「おつ、おお……！ これ、あんたのマシンか!？」

「ああ、そうだよ」

立ち上がると、興奮したような面持ちで影斗にずいっと近付く。

「すげー格好いいなあつて思つてさ。これ、Z400だろ？ もーさつきここ通り過ぎかけた時ブレーキガン踏みしてコケそうになっちゃったよ。いやあ、やつぱ生で見ると惚れぼれするなー！」

近付いてきた彼は、頬を上気させながら一人でしゃべり続ける。

「やつぱ……いつはイカつくていいなあつ……あ、ここほらグリップとかホイールとか、カスタマイズしてるだろ？ 雑誌で見たやつと違うもん！ 良いパーツ使つてんなー……、あんたセンス最高だな!!」

みずからのバイクへの思いをオーバーアクションを交えつつまくし立て、影斗へ振り向いて満面の笑みを見せた。

影斗は目を点にして、彼の言動を黙ったまま眺めていた。何か適当に相槌でも打とうと思つたが、あまりの興奮具合に圧倒されてしまつていた。

そんな置いてけぼりの影斗の様子に男子高生もはたと気付き、一転して恥ずかしげに頭に手をやった。

「あー……ごめん。つまり……あまりに格好良かったもんで、見学させてもらつてました。

怪しい者じゃないです！」

「…いいよいいよ。お前も持つてるの？ マイマシン」

その変わりように影斗は思わず嘖き出し、彼の話に合わせてやる。

「あ、いや…まだ免許持つてねえんだ。金もねえし…目下貯めてるところ！ これが俺の今のマシン」

彼は、影斗のバイク脇に無造作に停めたロードバイクのサドルをペンペン叩いてみせる。

「ああ、そうなの？ お前いくつ？」

「高一！ 昨日入学したばっかつす。あんたも高校生？」

「高三。…お前、ガッコ入ったばっかで制服汚すなよ！ ケツ見てみるよ」

「！ つあー！ やべえ母ちゃんに叱られるっ」

指摘され慌ててズボンをはたく彼を、影斗は改めて観察する。

立ち上がった上背は影斗より少し低いくらいで、首が太く脚もしっかりしていて、健康的な良い体格をしている。まだ春だというのに日焼けしたような浅黒い肌に目鼻立ちがはっきりした面立ちで、少し茶色がかった猫毛をツンツンに立たせ、いかにもやんちゃな男子高校生という感じだ。

学ランの襟に付いた校章からこの近隣にあるK工業高校とは先ほどから気付いてい

たが、あそこに通っている連中は不良が多いが悪い奴はいない。

他校に顔が広く友人も数多い分、自衛のために人選も意外と慎重な影斗だったが、目の前の彼は完全に素を見せている風であり、なかなか話も合いそうだ。

影斗は密かに、彼を自分の友人リストに加えることにする。

「…っーか、すんません。歳上相手なのにフランク過ぎたな、俺」

「気にすんな、俺お前の先輩じゃねえし。タメ口でいいよ」

「えー？ いいの？」

「おう」

「そっか？ じゃあお言葉に甘えて！ 俺、花房^{ハナフサ} 烈^{レツ}」

「俺、エイト」

親しい、親しくないを問わず、影斗は他校生にフルネームを名乗らないことにしている。

お互い名乗ったところで、サイドバッグから取り出したバイクのメカニカル雑誌を烈に差し出す。

「バイク好きならさ、これやるよ。俺もう見終ったし」

「えっ？ …ああつ、この前発売したばかりの増刊号！ 悪いよ…これ結構高いじゃん」

「いーって、これ見て貯金励めよ」

「…わかった、そうする。ありがとな、エイト！ 歳近いヤツが実際持つてるの見たら、俄然やる気出てきた！ まずは母ちゃんに賃上げ直談判だな…」

影斗がそこで、さらつと話題を変える。

「お前、なんでそんなにバイク乗りたいつて思ったの？」

「ああ、父ちゃんが昔からバイク乗りでさ。ツーリングクラブとかで遊びに行く時、一緒に乗つけて連れてつてもらったりしてて。メンテナンスとかも自分でしてるの横で眺めてたりしたら、興味湧いちゃうのは必然じゃん？」

「なるほどねー」

「つまりはウチにバイクあるんだけど、父ちゃん絶対使わせてくれねえの！ 乗りたかったら自分で好きなのが買えつて。まあ、そりやそうなんだけどさあ…」

烈は落ち込んだように肩を落とすが、すぐに顔を上げ、ニツと笑った。

「とりあえずモノは先として、今はバイクのメンテできるように、整備士の専門入るのが目標かな！」

影斗はうんうんと頷きながら、彼の人生設計を聞いてやっていた。

その屈託のない笑顔に、少し眩しきを感じながら。

コンビニ前で影斗としばらくしゃべった後分かれた烈は、自宅最寄り駅近くへ自転車

を走らせていた。

と、通りかかった改札口から、真新しいブレザーに身を包んだ小柄な学生が出てくるのを見つけ、キキッとブレーキをかける。

「おーいつ、蒼矢！」

再び自転車のペダルに足をかけると、呼び止められ振り返る蒼矢の横に寄せた。

「…自分から来るなら、大声で呼ぶなよ…」

「あつ、わりい。家の前とかと同じ感覚になっちゃった。だって学校帰りに会うなんてそうそう無いじゃん？」

むすつとした表情を向ける蒼矢に、烈は笑つてとりなした。

そのまま二人は並んで家路へ向かう。烈は腕時計をチラ見する。

「今帰りののか？ 遅くね？ もう授業みっちりなの？」

「委員会に入つて…それで」

「いいんかいー？ お前早速かよ、さすがだなあ」

いつものように、烈は賞賛の思いをにじませながら蒼矢の顔を覗き込む。

「…お前こそ、遅いんじゃないか」

「俺はただの寄り道！」

「…あ、そう」

そんな彼からごまかすように視線をそらしていた蒼矢だったが、その返答にじとつと一瞥すると、歩みを早める。

「あ、後ろ乗ってけよ。速達しちやる！」

「二人乗りは交通違反」

「あー、…そつか」

スタスタと前を行く蒼矢を眺め、頭をかいていた烈は、パツと気がついてその後ろ姿に声をかけた。

「じゃあさ、ウチで飯食ってかね？」

烈を置いていこうとする勢いで歩いてきた蒼矢の足がピタツと止まり、ゆっくり振り返った。

「…いいのか？」

「もちー！」

その、嬉しさを隠しきれず少し頬が紅潮した顔に、烈は満面の笑みで親指を立ててみせた。

第6話 | 伶俐な頭にのぼる熱

三人のそれぞれの接触があつた日から数日が経ち、蒼矢は日課になりつつある屋外ラ
ンチへと向かい、少し疲れたような表情で温室の扉を開ける。

どのタイミングで移動しているのか影斗は必ず蒼矢より先に来ていて、これまた校内
であれば絶対手に入らないだろう、どこぞのカフェのカップドリンクを一つ蒼矢に差し
出す。今日は少し肌寒いからか、温かい飲み物が入っている断熱素材のカップだ。

「おっつー。今日はホットミルクにしといたぜ」
「…ありがとうございます」

最初の数回はかたく固辞した末押し切られる形で受け取っていたが、既に諦めつつ
あつた。

小さく息をついてから、コンビニおにぎりの包みをペリッと剥きはじめる蒼矢を、影
斗は頬杖をつきながら眺める。

「…お前さあ、筋力なさ過ぎるだろ。肉食え、肉」
「っ!？」

突然の影斗の言に、蒼矢はおにぎりをものどに詰まらせかけた。

「あと持久力もねえな。もっと普段から運動しろよ。机向かってばっかなんだろー」
「…見てたんですか？」

「大体全行程観させてもらったぜ」

昼休み直前の2コマを使って、一年生は毎年恒例の体力テストを行っていた。学年一斉のため体育館とグラウンドのそこかしこで大勢が動き回り、さながら中規模のイベントのような光景だ。

動揺の色を浮かべる蒼矢に、影斗はつらつらと講評を述べる。

「まずお前、軽過ぎんだよな。あと10kgは増やすべきー！」

「…そんなに都合よく増やせません」

「じゃーせめて、もっと飯食えよ。見てつといつもおにぎりかパンかで2個しか食ってねえし。今日なんかさつきまで体動かしてたのに、腹減ってねえの？」

「それほどは。それに、少し空腹の方が集中力が続くので」

「いや、それにしたってさあ…大きくなれねえぞ？」

影斗に痛いところを指摘された蒼矢は顔を上げ、次いで少し気まずそうに目線をそらした。

「…努力します」

その返答に満足気に頷く影斗へ向けて、今度は蒼矢がじとつと視線を送った。

「…じゃあ、俺からも言わせてもらいますが」

「んー？」

「俺の授業を見てたつてことは、自分のをサボつてたつてことになりますよね？」

「!!」

入学してからしばらく会ってきた中で、影斗の学校生活には一般生徒には理解しがたい部分がいくつも混在しているような疑惑があったが、立場的に黙殺してきていた。が、今の蒼矢にはそこへ切り込んでいかなければならない責務があった。

「…どうなんですか？」

「え？ あ、まあ…」

「校則第一二条四項『授業時間内の学業外行動の禁止』、同七項『授業前後及び休憩時間以外の不必要な移動の禁止』に抵触しています」

「!? 覚えてんのかよ…」

「あと、初対面の時から気になってましたけど制服の着方がラフ過ぎです。ネクタイは持つてないんですか？ 不着用も校則違反ですよ」

口を開けたまま固まる影斗へ、蒼矢は淡々と詰めていく。

「…お前、まさか…風紀委員」

「はい、頼まれたので」

「マジかよー!!」

「マジです。先輩だけ特別扱いする訳にはいきませんので、逐一指摘していきますから。…あまり期待はしてないですけど」

テーブルに顔をつ伏す影斗を見ながら、蒼矢はため息をつく。

「ネクタイは今日はいいいよな? 明日からしてくるから! な?」

「…持つてきてないんですか?」

「…:…ある。わーった、持つてくる、してくるから待つてろ!」

美しい顔から注がれるその冷めた視線に、自分がいたたまれなくなった影斗はたまらず立ち上がり、そそくさと温室を後にした。

その背中を見送り、居なくなった後をぼんやりと眺めていた蒼矢は、やがて視線を手元に落とした。

「…:…的確だな、先輩…」

そうつぶやきながら、烈の姿を思い出す。

小学校卒業くらいまでは確かに同じくらいの背格好だったはずなのに、その後も順調に横にも縦にも大きくなっていった烈は、いつの間にか見上げる存在になってしまっていた。

多分普段からの運動量や食べる量も違うだろうし、そもそも家系の影響だってある。

それにしても…

…身近で一緒に育ってきた同年にこんなにも差をつけられてしまうと、どうしても色々考えてしまう。

蒼矢はテーブルに腕をつき、深く息を吐き出した。

「……！」

ふと、胸の方からこみあげてくるものを感じて、軽く咳き込む。

「…っ」

再び数回咳き込む。目を瞑り、なんとか我慢しようとするが治まりそうにない。

……まずい…

ジョギングのような軽い歩調で温室に戻つてくると、影斗は扉前で適当にネクタイを首にかける。

「着けてきたぞー。ぶっちゃけ初めてかー、三度目くらいかもしれないねえ」

と言いつつ温室内に足を踏み入れ、奥のテーブルへと目を向けた影斗は一瞬動きが止まる。

「蒼矢？」

早足で近付き、テーブルに顔を伏せたまま動かない蒼矢の顔をうかがおうとする。

背中を丸めて胸に手を当て、小さく抑え込むような咳をしている。影斗が戻ったこと

には気付いたものの、発作を止められず声が出せないようだ。

前髪の間からのぼせたように紅潮した目元と頬が見え、影斗は額に手を当てる。…自分の体温よりだいぶ熱くなっている。

「お前、熱あつたの!?!」

と、驚きついでに少し声を張り上げてしまった影斗は、それまでのことを思い出し、呆れたようにテーブルにガクツと雪崩れかかった。

「…具合悪いなら体力テスト欠席しろって…!」

午後の授業が始まる予鈴が鳴り、校外の定食屋で昼食をとってきた鹿野は住処である化学準備室へと戻っていた。

準備室を視界に捉えると、なにやらそわそわと周囲を動き回っている男子生徒に気付く。

「…宮島あ? 何か用? 次、君のクラス僕の授業じゃないよ」

「! おせーよ鹿野ちゃん」

いつもの調子でのんびり話しかけた鹿野だったが、影斗は声を聞くなり少し苛立ちのじむ表情で振り向いた。普段の彼らしからぬ素早い所作で駆け寄り、至近距離まで詰める。

「うわお、何!?!」

「頼みがあるんだ、次始まるまでに何とかして」

「え?」

「蒼矢が熱出した。このまま帰らすから、蒼矢の担任には鹿野ちゃん預かりで断つといて欲しいんだ」

「ええー!?!」

「俺送つてくからさ。あと頼むぜ」

「うえ、あ、ちょ…」

要件を話し終えると、影斗は再び駆け足でその場から離れていく。状況についていけなかった鹿野は、影斗の小さくなっていく姿を呆然と目で追っていたが…がつくりと膝に手をついた。

「ちよつとなんなのよ…てか、教師をあごで使うなよな…!」

手早く鹿野へ言付けを済ませた影斗は、蒼矢の上着と通学バッグを回収し、温室へ戻ってくる。

「…すみません、先輩」

蒼矢はぐったりと椅子に背を預けていて、影斗の声に少し気だるそうな、紅らんだ顔

を上げる。咳は治まってきており、さっきよりは具合が落ち着いているようだった。

上着を着せてやると、影斗は彼のバッグを肩にかけた。

「いいって。立てるか？ んじゃ行くか」

「？ はい」

いまいち理解を得ないままに、蒼矢は影斗に案内され裏門へ向かい、脇から抜けるとある飲食店の裏手へ導かれる。

そして、奥に停められていた黒塗りのバイクへおもむろにまたがり、エンジンをふかし始める影斗をぼかんと眺めた。

「後ろ乗って」

平然とした顔で手招きする影斗だったが、蒼矢の紅潮していた顔がみるみる青くなっていく。

「——。む、無理です…!!」

「ああ、バイクは初乗りだよな。心配すんな、俺運転上手いから」

「そういう問題じゃなくて…!」

怖気づく蒼矢に影斗は余裕の表情で近付き、彼の背中に脱いだブレザーを通し、自分の腹に回す仕草をする。

「こーやって俺につないどくから、安心しろ。怖かったらしがみついているから」

「……」

言葉を返せないまま影斗を見上げると、影斗はいつもの調子でニツと笑い返してきた。

熱が出ているのも手伝って、冷静な判断ができない。蒼矢は彼の笑顔を見て、なんとなく大丈夫かとも思ってしまった、小刻みに頷いた。

「よし、行くぞ」

影斗は蒼矢の眼鏡を一旦預かってヘルメットをかぶせてやり、先にバイクにまたがる。ついでおっかなびつくり足をかける蒼矢を支えつつタンDEMシートへ乗せ、あらかじめ聞いた自宅住所をスマホのナビに読み込ませると、彼を結わえつけてスルツと走り出した。

バイクは徐々に速度をあげ、身体が風に切られていく。初めての感覚に、蒼矢は必死に影斗の腰にしがみついた。

…やっぱり断ればよかった…

第7話 膨らむ慕情

いつもなら通学には一時間ほどかかるのだが、影斗のバイクは30分足らずで蒼矢自宅脇へ着いた。

ややふらつきながら下車する蒼矢を支えつつ、影斗はその邸宅を見上げた。

「…お前んち、でけえなあ」

宮島家も社屋兼自宅のためかなりの敷地面積を持っているが、居住スペースだけで見れば？城家の方が大きい気がする。

鹿野からは、蒼矢の父親が某省の官僚だと聞いていた。そういう家の子息は校内にゴロゴロいてそれほど珍しいものではないが、鹿野が言うには蒼矢父はその中でも別格のキャリアらしい。

蒼矢を見ていれば父親の人物像もなんとなく想像つくが、影斗には特に興味が無い部分だったので、話を振るのはやめておく。

「疲れたか？」

「…ちよつと。今鍵開けます」

下ろされたその場で少し動けなくなっていた蒼矢は、影斗からバッグを受け取ると、

家へ案内し始めた。

暗く冷えた玄関を通されると、蒼矢は階段を上がり、リビングをスルーして三階へと向かう。

やや戸惑いつつ蒼矢に付いていく影斗は、三階へ上がっていく彼に気付かれないよう、そろつとリビングを覗き見する。

「……」

リビングも電気がついておらず、家具はひと揃えあるものの異様に殺風景な景色が広がっていた。なんとなく、生活感が感じられないような……空気が冷たいような。

三階の蒼矢自室へ入ると、影斗はまたしても密かに驚く。物はベッドとデスク一式にPCのみという、非常にシンプルというか全く”遊び”の無い部屋で、そこそこ広い空間のほずなのに壁一面にそびえたつ大きな本棚が圧迫感をかもし出し、窮屈ささえ感じさせていた。

雪崩れ落ちてきそうな分厚いハード本の壁を見上げながら、通学バッグをラグに放る蒼矢に声をかける。

「……お前んち、日中誰もいねえの?」

「はい。父は大体帰りが遅くて……外泊も多いので」

「母ちゃんも仕事?」

「はい」

「やっぱ遅いの？」

「……あ、あの…国内にはいないんです」

「えっ」

さすがに驚きの声が出てしまった影斗に、蒼矢はやや焦った風に続ける。

「海外で仕事をしていて…たまに帰ってくるんですけど…」

「…はあー」

影斗は先ほどチラ見したりピングの光景を思い出し、なんとなく合点がいったように息を吐き出した。

「…すみません、買い物行ってなかったの…何もお構いできませんが」

「ああ、いいって。元々長居しに来てねえし」

「そうですか。じゃ、俺ちよつと…」

そう言うのと、蒼矢はブレザーを脱ぎ捨て、ベッドにうつ伏せにダイブした。

「あつ、待って…薬飲んでからにしろっ」

そのまま目を閉じかける蒼矢を止め、影斗は帰りがけに調達した解熱剤を取り出す。

起こして支えてやると、割と素直に従って薬を飲み下す。飲み終わると、蒼矢は影斗

をじっと見上げた。

「? 何だ?」

「…影斗先輩、送って下さってありがとうございます」

「! おう。余計弱らせちゃまったかもしれないねえけどな。悪かったな」

「はい、疲れました。バイクはこりこりです。…もうこんなことはこれきりですからね…?」

「」

そう言いながら、限界が来て目が閉じてしまった彼をゆっくり下ろすと、影斗は即ベッドから離れ、デスクチェアに腰を下ろした。

至近距離で見つめたまま、うつすらと笑う蒼矢の顔に、目を奪われてしまった。

熱であまり正気じゃなかったとはいえ、多分出会ってから初めてであっただろう笑顔を見せられ、完全に不意打ちを喰らっていた。

「…やばい」

思わず独り言が漏れ、影斗は赤面した顔を両手で押さえた。

影斗の中に占め始めた蒼矢への思慕が、どんどん膨らんでいっていた。

——それってさ、ただの興味なんだよね? …恋愛対象とかじゃないよね? ——

ふと、鹿野から投げかけられた言葉を思い出す。

あの時は冗談ほく流したものの、今はもう、それじゃ済まされないレベルになってい

た。

今まで数多くの女性と付き合ってきて、どの相手ともそれなりに楽しく恋愛してきたが、これほど急激に感情が噴きあがるような経験をしたことは無かった。

最近だけで言えば、半分金策目当てで年上の高収入ばかりを選び、更にその裏でレントル彼氏に手を伸ばすというようなことが続いていた。今乗っているバイクも、そんな行為を重ねて手に入れたものだ。

自分の趣味に投資する目的込みで付き合っていたことになり、あからさまに傷つけてはいないが、誠実ではなかったと自覚している。

だから影斗は、今回は”純粹”だと思ったのだ。

…俺、マジでこいつのこと好きになっちまったんだな…

静かな寝息をたてる蒼矢の横顔を眺め、影斗は長く息を吐き出した。

「…ヤッ」

住人を寝かせたまま鍵をかけずに家を出ていく訳にはいかず、とはいえせつかく眠り始めたところを即起こすのものはばかられたので、しばらくしてから声をかけることにし、影斗は階下へと降りていく。

「…なるほどねえ」

そして改めてリビングを見渡し、息をつきながら腕を組んだ。

引越したてなのかと思つたが、軽く話を聞いてみれば、このモデルルームのようになりビングの様相にも納得がいく。普段から両親共にまともに家におらず、当の蒼矢は玄関と自室を往復するだけの生活で、おそらく使用目的をほとんど果たせていないのだ。

…そして、もう一つ気付いたことがあつた。

入学式当日の蒼矢を思い出してみる。内部・外部を問わずほとんどの新入生が親同伴で式に参列していたが、彼は一人だつた。

学校側としては例外の待遇で、？城家としても息子が代表して式の挨拶に臨むとなれば、両親とは言わなくとも最低限片方の親だけでも参列して見守るものではないだろうか。

影斗は自分の時も一人で、そもそも入学時点で既に学校に興味が無かつたため、あの時の蒼矢の違和感に気付かなかつたのだ。

この大きな家を見れば、おそらく経済的には恵まれているんだろう。でも、それ以外のところでは…満たされていない、足りない部分があるのかもしれない。

…ウチと似たところあるかもな…

「なんか作つてやるか…」

気を取り直してとりあえず冷蔵庫を開けてみる。しかしあるのは調味料と飲料ばかりで、冷凍庫にもロックアイスくらいしか入っていない。

「…本当になんもねえんだな…！」

蒼矢の言葉が誇張でなかったことに、影斗は呆れたトーンでつぶやく。

振り返って視線をレンジボードへ移すと、パック飯がひとつ寂しく転がっているのに気がついた。

「…かろうじて米はあったが…」

パック飯をお手玉しつつ、影斗は思案する。米だけで、どう飯を作ってやるか…

と、階下でインターホンが鳴る。この家の住人ではないため居留守一択だったが、続いて届いてきた声に、影斗は目を丸くする。

「おーい、蒼矢ー！　まだ帰ってねえかー？」

第8話 顔合わせた三人

「へっ、あれ、エイト!？」

不在と判断して出直そうとした背中でドアが開き、振り返った烈は驚き過ぎて変な声が出てしまった。

「何で蒼矢んちにいんの!？」

「…いや、その台詞そっくりお前にも返すけど」

ドアを開けて応対した影斗も同じく、驚きの声をあげる。

「俺んちここの近くなんだよ。エイトもこの辺に住んできたの?」

「いやいやまさか。蒼矢と高校同じでさ。あいつ学校で具合悪くして…居合わせたから

”頼まれて”送り届けたとこ」

「えー!?! そ、そうだったの? そっかー!?!」

烈は信じがたいという面持ちで、影斗を上から下まで眺めた。

「あつ、で、蒼矢大丈夫なのか?」

「じきに良くなるんじゃないかねえかな。さつき寝ちまったけど、一応薬飲ませたから」

「そっかー。…どうしようかなコレ、渡そうと思ったんだけど」

烈が手元を見て悩むような仕草をし始めると、階上でドアの開閉音がして、ゆっくりと蒼矢が降りてくる。玄関の喧騒さに目が覚めたようだ。

「烈…来てたのか」

「おう！ ごめん、起こした？」

「お前の声が大き過ぎる」

少しだるそうな表情で目をこする蒼矢に、烈は影斗越しに応答する。

間に立っていた影斗は、当然の質問に切り込んでいく。

「…お前らどういう関係なの？」

「あー、いわゆる幼馴染！ かれこれ10年？」

無言で呼応する蒼矢を引き寄せ、烈は肩に手を回す。

「!? お前、熱あんな。寝とけよ！」

「お前が起こしたんだろ…もう、離せよ感^う染^るするからっ」

鬱陶しそうに烈の身体を突っぱね、解放された蒼矢は影斗を見上げた。

「先輩すみません…寝てしまっ」

「ああいいって。そのうち起こすつもりだった」

「烈と知り合いだったんですか？」

「つい最近からな。何日か前T駅近くのコンビニで会ってさ、ちよつとそこで色々話し

て」

「バイク乗ってるだろ、エイト。停めてあったのに見入っちゃってさ」

「ああ…、前から欲しいって何度も言ってたな」

「俺…決意を新たにしたよ。約束通り、買って二ケツできるようになったら一番にまずお前乗つけてやるからな！」

「乗らない」

「へっ!? なんぞだよどしたよ急に!」

「絶対乗らない。お前も考え直した方がいい」

「はー!?!」

やり取りを聞きながら、影斗は改めて目の前の二人を見比べた。

正直なところ、蒼矢と烈には背格好も顔の造形も、言ってしまうえば中身もおそらく類似点が無いように思える。同じ学校に通っている同級生と仮定すれば、間違いなく別々の友人グループだっただろう。

それが、”幼馴染”という関係で括れば全ての不合理が解決する。

…とはいえ、これほどタイプの違う者同士が10年も関係を続けているとなれば、それはもう幼馴染という枠でもおさまりきらないのではないだろうか。

影斗は素直に感心していた。

「そっか、蒼矢の学校の先輩だったのかー…」

烈は再び、影斗をまじまじと眺める。

「そうだよ。この前会った時も制服着てたじゃん」

「いやー、まあ言われてみれば…そうだよな。なんかさ、エイトが着崩し過ぎててわかんなかったわ！」

「…ああー…」

他意無しにあっけらかんと言つてのけた烈だったが、横から蒼矢の冷ややかな視線が刺さる影斗は、明後日の方へ目を向けた。

「つと…俺、これ渡しに来たんだった」

烈は蒼矢の手に、持つていた小鉢を載せる。

「これ、母ちゃんから。今日の晩飯につて」

「…ありがとう」

「ちゃんと食えよ？ あと、あんまり無理すんなよ、お前気管支も弱いんだから」
紅ら顔を隠すようにうつむきながら小さく頷く蒼矢を見て、烈はニツと笑う。

「じゃ、長居しちゃ悪いから！ またなー」

「！ あ、烈待った」

そう言いつつドアを開けて出ていこうとする烈を、影斗が呼び止める。

「お前んちここから近いってどのへん？」

「その交差点渡ってすぐだよ」

「じゃさ、家から卵一個もらって来れねえ？ あればコンソメも」

「?? わかった、ちよつと見てくる！」

軽快に駆け出していく烈を見送り、不思議そうな顔で見上げてくる蒼矢に、影斗は歯を見せながら悪戯っぽく笑った。

蒼矢をダイニングチェアに座らせ、影斗はここ最近使用履歴のなさそうな広いキッチンに立つ。

「もったいねえなあ、良い水場なのに」

「エイト、持ってきたー」

そこへ烈が実家から戻って来て、頂戴してきた卵とコンソメキューブを影斗へ手渡す。

「よくやった。次食器用意してくれっか？」

「了解ー！」

まだ熱が高い蒼矢はぼんやりとした面持ちのまま、賑やかに動き回る男二人を目で追っていた。

影斗の調理は手早く進み、ほどなくしてテーブルに卵粥と、温められた花房家の煮物が並べられる。

蒼矢の目が見開かれ、自然と上半身が器に寄る。

「先輩が作ったんですか…?」

「おう、大した工夫はしてねえけど、悪くないと思うぜ」

「…いいんですか? こんな…」

「あー、心配すんな。お前んちに眠ってたパック飯と、烈んちの卵くらいしか使ってねえから」

「そうですか…、では、頂きます」

横でうんうんと頷いている烈を見、納得した蒼矢はゆっくりとお粥を口に運ぶ。

「…美味しいです」

「だろ?」

ぽつりと漏れたその言葉と、わずかにほころんだ表情を見、影斗は満足そうに頬杖をつく。

すると、同じく蒼矢の食事風景を見ていた烈が、やにわに彼の腕を掴み、お粥の盛られたスプーンを自分の口に頬張った。

「!? おいつ…」

「…うめー！ 全然簡単そうに作ってたのに、店が出るやつみたいじゃん!!」

さすがに動揺が声に出てしまった影斗だったが、当の烈に絶賛されてしまいそのまま閉口する。

「すげえ〜！ ちょよ、もう一口…」

が、更に器に顔が近付いたところで蒼矢の手がスプーンから離れ、烈の両耳を手ひどくつまんだ。

「いのでででつ!!」

「何してるんだお前は…？ 感^っ染^っするって言っただろ！」

「だってっ…お前が飯食ってそういう顔するのって、うちの母ちゃんの飯食ってる時以外見たことねえんだもん！ だからっ…よっぽど美味いんだと思って、食ってみたくなっただよよ！」

「……」

涙目になりながら耳を押さえる烈の言い訳を聞き、制裁を加えた蒼矢は手を離し、気まずさを取り繕うように座り直した。

「…だからって、俺のスプーンから食べるなよ…自分の持つて来いよ」

「いや、マジ悪かった。これはエイトが蒼矢に作ったやつだもんな。…本当すげえな、エイト料理上手いんだな！」

「…ああ、まあな」

二人のやり取りを黙って眺めていた影斗は、満面を笑みを浮かべながら再び賞賛してくる烈に、ニツと笑顔を返した。

食後ゆつくり休むように蒼矢に伝え、今度はきちんと戸締りをしてもらい、影斗と烈は帰路につく。

影斗はバイクを転がし、烈の家まで二人で歩いていくことにする。

「——さつき、出会って10年とか言ってたけどさ。すげーな、ずっと続いてて」

「ああ…うんまあ、一緒に遊んでとか顔合わせてとかかってなると、そんなに長い付き合いじゃないかもしれねえけど」

「中学まで一緒だったの?」

「いや、小学校まで。六年の三学期になつて”私立行く”とか突然言うからビビったよね。…そういう肝心なこと全然言わねえから文句の一つでも言つてやりたかったけどさ、あいつが勉強頑張つてたことも知つてたから、”わかった”としか返せなかつたよ」

烈は、思い出を回顧しているのか、上を向きながら独り言のように当時を振り返る。

「蒼矢んち、父ちゃんも母ちゃんもあんまり家になくてさ、ほとんどいつも一人なんだよね。…俺はそういうの耐えられないから、中学あがってもウチにいつでも飯食いに

来ていいってだけは言っといたんだ。したらホントに、そういう時くらいしか顔合わせられなくなっちまったなー」

「電話とかは？」

「俺らどっちも携帯持つてねえのよ。しかも俺の方は家電つてか、商売用のしかないからさ、使い辛くつて…」

「なるほどね」

「…学校違うくらいどうつてことないと思つてたけど…やつぱ痛いな、生活時間全然わかんなくなっちまうし。登下校で会えたらラッキー、遊ぶ約束取りつけられたらミラクルつて感じかな！」

明るく話すもどこか寂しげな表情も見せる烈だったが、影斗の中で何かが引つかかる。

「さつきつから聞いてると」 お前が蒼矢に”つて風だけど、あいつから誘うとかはねえの？」

そんな影斗の素朴な疑問に、烈はああと気付いたように視線を合わせるが、首をひねつてみせた。

「…それは難しいなー…あいつそもそも出歩くタイプじゃなくてさ。普段から勉強ばかりで…まあそれは蒼矢の父ちゃんが厳しいつてのもあるんだけど」

「ふうん」

「でも、本で読んだこととか沢山教えてくれるし、そういう話してる時はいつも楽しそうだし、本当は色々やりたいこととか興味あることがあるのかもしれないねえな」

「でも、本だけで終わっちゃってますと」

「んー、突っ込んで聞いてないけどね。でも、あんまり自由に生きれてない気がするんだよな」

「…そっか」

などと会話を交わしていると、ほどなくして花房家の酒屋に着く。

「!? マジ近いな!」

「だろ? 今度ウチにも来てよ、なんなら酒買いに来て! 父ちゃんの趣味で珍しいのも置いてるから、親父さんに是非!」

「おー、そうだな、来るわ!」

自分の分ならいざ知らず、父親に買っていくことは無いだろうと思いつつも、影斗は快諾して烈と分かれた。

第9話 外界へのいざない

蒼矢が体調を崩してから週が明け、影斗はいつも通り構内のあまり人目につかないポイントで蒼矢の到着を待ち、いつも通り少し早い時間に登校してきた蒼矢を迎える。

「よう」

「おはようございます」

「調子どうだ？」

「はい、もう大丈夫です。…先週は先輩には本当にお世話になりました」

「いーっていーって。治ってよかったな」

綺麗な所作でお辞儀する蒼矢に気恥ずかしげに手を振ってみせ、周囲を確認した影斗はそのまま蒼矢の隣を歩き始める。

「具合悪くなったら我慢すんなよ、お前結構無理するタイプだろ」

「…気をつけます」

「あ、あとさ…気管支弱いつてこの前烈言つてたけど」

「ああ、はい…体調崩すと咳き込みやすくて」

「そっか」

影斗は今後、蒼矢の前では絶対煙草を吸わないと心に決めた。

「じゃ、こつから本題なんだけど。今日放課後ヒマ？」

「？ 今日…ですか？」

「そー。二人で遊びに行こうぜ。行先はもう決まってるから、あとはお前だけ！」

突然のお誘いにやや戸惑う蒼矢だったが、影斗は笑顔で畳みかけていく。

「門限とかはねえよな？ そんなに遅くはならねえ予定だけど」

「あ、あの」

「都合悪かった？」

「…いえ、そんなことは…」

「じゃ、決まり！ ガツコ終わったらI駅西口のスタバ集合な。あ、一旦家戻って着替え
て来いよ？ 制服のまま来んなよ！」

「…は、い」

かなり強引に進めたものの約束を取り付けた影斗は、上機嫌で蒼矢と分かれる。
放課後までの時間が待ち遠しく、その日は一日心が躍った。

放課後、影斗は帰りがけにさつきと着替え、先に待ち合わせのカフェ内でスタンバイ
する。

蒼矢の実家から最寄りの駅を指定したため、ほどなくして一旦帰宅した蒼矢が店に入ってくる。

「…お待たせしました」

そう、どこか遠慮がちに自分の前に立つ蒼矢を、影斗は上から下まで眺めた。

「…お前…、着替えて来いっつったじゃん」

「!? 着替えました」

「いや、わかるよ? わかるけどさ、それじゃ制服と変わらんじゃん」

「そう言われましても、いつもこれですから」

ボタンを襟元まできっちり留めた無地の襟シャツに黒いパンツと靴という、期待を裏切らない格好で現れた蒼矢に溜め息をもらしつつ、影斗は持ってきた大きめのトートバッグを肩にかけて立ち上がる。

「ちよつと来い」

「え…えっ?」

そしていつぞやと同じように、意図を理解できてない蒼矢を引きずりながら、レストルームへ向かう。

困惑顔で突っ立つ蒼矢を傍に置き、影斗はトートバッグに入れてきた衣服を吟味し始める。彼が地味コーデで来るだろうと見越して、自分が過去に着ていた服をいくつか

持つてきていたのだ。

インナーのタンクトップを見せるようシャツを全開にし、裾もパンツから出して上から薄手のカーディガンを羽織らせる。確認したら脚が綺麗だったので、短め丈のパンツに履き替えさせ、ロールアップする。ついでに髪型にも若干手を加え、額を見せるスタイルに仕上げる。

影斗は全身をバランスを遠目から確認し、最後に眼鏡を外して自分のVネックに掛けた。

「完璧！ いいねえ、似合ってるよ。サイズどうかなーと思ったけど、大体OKだなー」
満足気にうなずく影斗に、蒼矢は惘然とした表情で返す。

「先輩…俺で遊ばないで下さい」

「失敬な、こっちは真剣だ。お前という素材を最大限に活かせるコーデにしたつもりだぜ？」

「…なんだか落ち着かないんですが…あと、眼鏡返して下さい」

「ダメ。今日は一日それでいろ。無くてもある程度は見えんだろ？」

「…はい」

不服そうな表情を浮かべる蒼矢を連れ、影斗はカフェをあとにした。

二人は駅から電車に乗り、目的地のN駅へ向かう。

車内に入った途端、雑多に配置している人々の目が一気に二人に集まった。若干混雑していた車内の空気が一変し、影斗は視線に刺されるような感覚におそわれる。

自分を見る目も確かに感じたが、ほとんどの行き先は蒼矢だった。電車に乗るまでの駅構内やホームでもそうだったが、尋常じやないほどの視線が蒼矢に注がれている。

…やり過ぎたか…？

影斗は内心、先ほどノリノリでコーディネートした自分を反省していた。

単純な容姿の美しさもあつただろうが、影斗がユニセックス風に仕立てあげたため、蒼矢のビジュアルは余計に性別が判りにくくなっていた。中にはそこを探るような好奇に満ちた目も混ざっていて、顔以外にも剥き出しになった脚や胸元に、焼けつくような視線が集まっている。

「……」

影斗はさりげなく彼をドアポケットへ誘導し、乗客らからの視線を遮るように横に立ってあげた。

そろっと蒼矢の様子を確認するが、当の本人は眼鏡を外したことによりやや視界が悪いのか、そんな周囲には全く気付いていない。

「…お前、目大丈夫だろうか？ 見えてるか？」

「なんとか。少しぼやけますけど」

眼鏡を外したことで、思いがけない別のメリットもあつたと影斗は内心ほっとしつつも、蒼矢は野暮くらいが丁度いいのかもしれないと考えを改めることにした。

第10話 遊び人の庭

「どこへ行くんですか？」

「着いてからのお楽しみ」

最初の目的地は、影斗の行きつけの屋内遊技場だった。

「…ビリヤードですか」

「やったことあるか？」

「いえ」

「なら良かった」

カウンターで受付を済ませた影斗は、もの珍しそうに場内をキョロキョロと見回す蒼矢の背中に手を置き、道具を持って奥へ向かう。

「あれっ？ エイト！」

と、そこへ後ろから声がかかる。何度か影斗と交流のある女子大生二人組だった。

「おー、久し振りっ」

「ほんとしばらくじゃん！ どしたの最近」

「結構忙しくてさ。学校とか」

「えー!? あんたがあ? 信じらんない。らしくないじゃん」
「ひでえなあ」

などと軽く会話を交わした後、彼女達の視線は当然影斗の隣に注がれる。

「——で、こつちのコは?」

「かわいいー。紹介してよ!」

あけつぷろげに自分へ興味を示す女子二人に、女性と交友経験の乏しい蒼矢は気圧されてしまっているようで、何も言えずに押し黙る。

そんな三人の様子を見て、影斗はニヤツと笑い、やにわに蒼矢の肩を抱き、自分に引き寄せた。

「ああ、彼女」

「えー!?!」

「ちよつとピツチ早くなあい!?!」

「……!!」

”女性”と紹介されても全く疑わず、ただ影斗の交際事情にのみ驚きを隠せていない二人を見て、蒼矢は恥ずかしさと憤りの入り混じる表情で影斗を見上げる。

身の危険を感じた影斗は、手早く訂正を入れた。

「……と見せかけて、学校の後輩!」

「あ、そうなの? ……え?」

「学校? って…」

影斗が男子校に通っていることだけは知っている女子大生達は、にやにや笑う影斗を見、ついで赤らめた顔をうつむかせる蒼矢をまじまじと見る。

「…男の子、なの?」

「…はい」

小さく頷く蒼矢の姿に、二人は一時固まっていたが…直後に湧き立った。

「ホントにー!? やばーい!!」

「かわいいー!!」

「……!?!」

性別が割れてもたいして反応が変わらない女子大生達についていけない蒼矢を置き、確信犯の影斗はその場を離れていく。

「嘘だと思いうなら触ってみ。俺飲み物買ってくるわー」

「…えっ…いいの?」

「!? あ、いえ、あの」

「ハグくらいならいいかな!? いいよね!?!」

「えっ!? は…はい」

「っ……かわいいー!!」

流れでそのまま四人でビリヤードに興じることになり、その後も影斗行きつけの古着屋やアクセサリーショップをのぞき、夕食まで一緒する頃には蒼矢も女子大生達とだいぶ打ち解けていた。少し歳の離れた女の子のノリの良さに圧倒されつつも、いい刺激になつたようだ。

あつという間に時間が過ぎ、腹と目の保養を満たされた女子大生達と分かれる。

「ソウヤくん、エイトと付き合うのもいいけど、あんまりホイホイについて行っちゃだめだよ?」

「そうそう、エイトいい奴だけど、安全じゃあないからね!」

「おーい、本人目の前にいるよ」

「あははっ、じゃーね!」

「またあそぼっ」

二人を見送り、影斗が蒼矢へ振り返る。

「さーて、腹も膨れたし。まだ時間大丈夫か?」

「はい」

「OK、じゃ次行くかー」

「今度はどこですか?」

「俺の行きつけのバー」

「…バー？」

影斗の口からサラツと出た単語に、蒼矢は疑いの目で彼を見る。

「先輩、まさか——」

「大丈夫だって、ちゃんとお前用にノンアルもあるから。心配すんな！」

「そういう問題じゃないんですが…」

「置いてくぞー」

蒼矢の疑惑をあつさり受け流し、影斗はさつさと歩きだす。

「おー、エイトじゃん」

と、蒼矢が影斗に追いついたところで、前方から声がかけられた。高校生くらいの若い男が数人、二人の行く手をさえぎるように並んでいた。

「！ おお」

「久しぶりー。最近見ないと思ったら、またこの辺で遊んでんの？」

「まーな」

…まずい奴らに出くわしたなあ。

外面では軽い口調で友好的に対応するが、影斗は内で舌打ちした。

二ヶ月くらい前からこの近辺に現れるようになった連中で、人づてだがあまりいい噂

を聞かず、”面識がある”程度に抑えて必要以上に接点を作らないように気を配っていた相手だった。

が、グループの中心にいる男は、さも旧知の間柄のように親しげに話しかけてくる。

「何してたん？ 女？」

「いや？ 他で遊んでたりとか」

「へー。じゃあご無沙汰記念に、また店紹介してよ。他の奴らには色々教えてるらしいじゃん？ 俺らも混ぜてよ」

「んー、まあ考えとくわ」

「頼むぜー」

そんな感じで、適当に話を合わせて追っばらってしまったが、そう一筋縄にはいかなかった。やはり必然的に、男達の興味は影斗の傍らに移っていく。

「…そつちは？ 見ない顔だけど」

視線が集まってきたことに気付いた蒼矢は、先ほどのように影斗に遊ばれるのではと考え、今度は自分からきちんと名乗ろうと口を開きかける。が、寸前で影斗が蒼矢を後ろへ戻すように前に割って入った。

「ああ、ちよつとね。今日はたまたま連れてきただけ」

「ふーん。…ああ、そういうこと？」

やや不自然な行動をとる影斗に若干眉をひそめたが、何かを察したのか男はすぐにニヤリと笑う。

「お似合いじゃん。いいねえ、イケメンは不自由無くて」

「いやいや、そういうんじゃないよ」

「わかっているって…心配すんなよ、とって食ったりしねえから。さすがに人のものに手出すほど困ってねーよ」

「邪魔して悪かったな。じゃーな、今度飲みに行こうぜ。セッティング宜しくー」

「おー」

意図しない方向ではあるが連中は納得してくれたようで、そのまま影斗達を越して歩き去っていった。

男達の姿が見えなくなったのを確認した後、影斗は息をついて頭をかく。同じく目で追っていた蒼矢は、沈黙してしまった影斗をいぶかしげに見上げた。

「…先輩？」

「——やっぱ、今日は帰っかー」

「えっ？」

「悪い、気が変わったわ。バーはまた今度にしようぜ」

「…はあ」

影斗の急なプラン変更には蒼矢は面食らったが、特に異論は無かったので大人しく帰ることにした。

蒼矢の家まで二人で歩いて戻り、自宅へ着く頃にはすっかり暗くなっていた。

「送って頂いてありがとうございました」

「おー。だいぶ歩いたから疲れたろ。早く寝ちまえよ」

「またも丁寧にお辞儀する蒼矢の仕草に、影斗も満足そうな表情を浮かべる。

「…影斗先輩、今日はありがとうございました」

「だからいいって。俺から誘ったんだし——」

「いえ、そうではなくて。移動手段に電車を使って頂いてってことです」

「あ?」

話が見えないのか呆けたような返答を返す影斗を見て、蒼矢は目元を少し緩ませると、持論を展開し始める。

「今日行つた“先輩の行きつけ”のところは全部、バイクを停められるスペースがありました。直線距離で辿つても、おそらくバイクで巡つた方が早く着けそうでしたし…電車と徒歩だといふ遠回りじゃなかったですか?」

「…!」

「…すみません、あまり口に出す話でもないと思つてたんですけど、やっぱりきちんと言つておきたかつたし…嬉しかったので」

何も返せず黙つたままの影斗を見上げながら言い、気恥ずかしそうに視線をそらすと、蒼矢は自分の服装にはたと気付いてカーディガンをつまむ。

「これ…借りたままでしたけど」

「!…ああ、いいよやるよ。どうせ俺もう着れねえし」

「じゃ、ありがたく頂戴します」

蒼矢は門を開けながら振り返り、ぺこりと頭を下げる。

「今日は楽しかったです。——また明日」

そして頬を染めながら微笑うと、玄関の向こうに消えていった。

影斗はその場に棒立ちしたまま、閉じられたドアをしばらく眺めていた。

ついで、口を押さえながら夜空を見上げた。自分の顔が、みるみる熱くなつていくのがわかつた。

本気で照れてしまつている自分と、こんな些細なことにテンションが上がつてしまつている自分に驚いていた。

…——本格的に、やばい。

影斗の中で、蒼矢に対して抑えているものが、少しずつ緩んでいつていた。

第11話 指導者からの干渉

数日後、化学準備室内で携帯ゲームに興じる不良生徒を前にして、鹿野教諭は目頭に滲む涙をぬぐっていた。

「……すこいよ、感動的だね。もう連続登校何日目かなあ？ こうも君が心を入れ替えてくれるなんて……僕の二年余りの努力がようやく実ったってことかねえ！」

我関せずゲームに没頭する影斗の眼前で、鹿野は嬉しそうにいくつかの冊子を広げてみせる。

「そろそろ大学も決めないといけないと思うんだよねー。君は理系だから、将来を見据えると電子工学とか情報科学系がいいかなあ。僕としては経営学で、派手に起業っていう道もお勧めなんだけどね。君には誰かの下についてるより、一番上に立つてる方が似合いそうだからね！」

「……」

「ねえ、聞いている？」

「聞いているよ。その話はまた今度な」

「……」

影斗に生半可な返事しか貰えず、鹿野はふてくされたように頬を膨らませながら、見繕ってきた大学のパンフレットを机に置いた。

気を取り直すように息をつくとき、依然ゲーム機画面に目を向けたままの影斗を見ながら頬杖をつく。

「——最近本当によく学校に来れてると思うんだけど、何かあった？」

「蒼矢来てるから」

「…ネクタイも着けてるみたいだね」

「首に掛けてけば、蒼矢が締めてくれるから」

「…そっかー」

自分が年単位かかってても出来なかったそれらのことを、出会って一ヶ月足らずでさうとやらせた蒼矢に、鹿野は少し嫉妬した。

しかしてそれは鹿野が望んでいたことであり、この機を逃す手はないとも考えていた。

「…宮島さあ、こうして学校に来てるなら、授業出てきなよ。？城にはどうせ昼休みにしか会えないんですよ？」

「…まあ」

「……でそうやって時間潰してるよりは、ずっと合理的だと思うけどな」

「……」

そう助言を受けてこちらへちらつと視線を向けた後、黙ったまま再び画面に目を戻す影斗を見、鹿野は息をついてパンフレットを取りまとめ、席を立つ。

「…ま、無理強いはしないけどね——」

「わーった」

「え？」

鹿野の横でのそつと立ちあがると、影斗は軽く伸びをする。

「出てくるわ。次どこだっけ？ 時間割全然わかんねえ」

「——」

不良生徒の急展開に、鹿野は目を点にし、取りまとめたパンフレットを床にぶちまける。が、すぐ慌てた風に事務デスクのキャビネットを漁り、影斗の前にコピー用紙を突き出した。

「っはいこれ、君のクラスの時間割！ 次ココね!!」

「あ、ども」

「ああつ、今日はこれから僕の授業も控えてるからね！ 場所はもちろんこここの隣——」

「悪いけど鹿野ちゃんの出ねえわ。化学なんざ、学校でやる内容もう全部頭に入ってる

し」

「代わりにコレ、次のセーブポイントまでやっというて」

影斗からゲーム機を投げ渡された鹿野は、しばらく固まったまま彼を見ていたが…そのまま椅子に崩れ落ちた。

「じゃ、頼むぜ。充電勿体ねえから、セーブしたらちゃんと切つというてね」

化学教諭の悲愴な姿に噴き出しつつ、影斗は準備室のドアを開ける。そして閉じ際に、鹿野へ振り返った。

「…鹿野センセ、いつも色々世話かけて悪いな。あんがと」

そう言うのとニヤツと笑い、影斗は姿を消した。

「……」

鹿野は放心の表情で影斗の出でいった扉を見ていたが、深く息を吐き出しながら、椅子にもたれかかった。

「…良い子なんだけどなあ…ちよつとまだ不安だなあ。…僕の力不足ですね」

正直なところ、影斗と蒼矢の関係性には危ういものがあった。本人同士が、ではなく、周りの目が、だ。

この学校において二人のポジションはいわば両極端にあり、普通に考えれば学校生活において接点は無いはずで、会っている姿を目撃されるとどうしても目立ってしまう。

そのことが生徒指導の知るところになれば、二人のどちらにとつてもマイナスにしかならない。

でも…

どういう状況かは計り知れないが、あの不良体と付き合つても主体性を見失わず、逆に相手を更生させつつある鳴り物入りの一年生に、鹿野はひそかに期待をかけていた。

…彼なら、宮島に大学進学を選ばせ、無事卒業させてくれるかもしれない。

「——何事もなく、このままいい方向に落ち着いてくれればいいんだけど…」

それから数日、影斗は鹿野の奨め通りぼちぼち授業にも出席し、蒼矢との交流も危なげなくこなしていった。

そんな何事も無い日が続いていた何気ないある日、ふらふらと廊下を歩いていた影斗の前方から、彼を待っていたかように二人の教員が近付いてきた。

「！」

一人は風紀委員会の顧問であり、生徒指導も兼ねているベテラン教員・猿渡サツメで、天敵の登場に早々に気付いた影斗は内で頭を抱える。

そしてその隣に目線を移す。あまり接点がない教員で、誰だったかと素早く記憶を辿らせた。

「…ああ」

…確か、一年の学年主任か…

運良くすぐに気がついて、思わず小さく声が漏れた。

猿渡らは影斗へ早足で近付くと、若干辺りを見回す。どうやら影斗が一人になるタイミングを見計らっていたようだ。

「——宮島、ちよつと来なさい」

影斗は素直に従い、三人で手近にあつた小さな会議室へ入る。彼を座らせると、猿渡が対面にどかつと腰かけた。

「…最近、ちゃんと朝から学校に来ているらしいじゃないか」

「あー、まあ」

「授業にも何度か出ているようだ。どういう風の吹き回しだ？」

「別になんもないっすよ。そっちにとつても良いことでしょ？」

「…まあそうだな。大いに結構なことだ」

猿渡は若干声を張り上げて囁みしめるように頷くと、傍で控える学年主任から何やら資料を受け取る。

「本題はここからだ。…？城 蒼矢という一年生は知ってるな？」

「！」

一学年担当の教員が帯同している時点で察しはついていたが、唐突に蒼矢の名前が出たことに影斗は少し動揺し、肯定も否定も出来ずに沈黙する。が、猿渡はそのわずかな変化を察知し、影斗へ話めていく。

「隠しても駄目だぞ。こつちには報告が上がってるんだ」

「…知ってるよ」

「入学当初から接触していたのか？」

「…そんな感じ」

どこか投げやりな調子ではあるが素直に返す影斗の返答を聞き、猿渡は深くため息をついた。

「お前っ…うちの生徒内につるんでる奴はいないと思っていたのに…：よりもよってっ…」

そのまま額を押さええながらうなだれる猿渡に代わり、学年主任の教員が影斗に視線をやる。

「宮島、お前から？城に近付いたんだよな？」

「そうだけど」

「目的は何だ？」

「はっ」

「お前のような生徒が、彼に興味を持つ理由を知りたい。……こちらも測りかねている」

学年主任の思考回路は生徒を預かる教員として当然たるものだったが、影斗に地味に刺さった。

しかし、彼ら相手に本当の理由を言えるはずもなく、適当にごまかすしかなかった。

「…理由なんてないっすよ。ちよつと面白そうだと思っただけ」

「……」

そのコメントを聞き、学年主任はしばらく沈黙し、腕を組む。

「…その程度の理由なら、？城に近付くのはやめてくれないか？」

「……」

影斗はやや目を見開いて学年主任を見上げる。

「入学当初から知っているなら、？城がどういう立場でうちに入つて来たかわかるだろう？ 学校側は彼の今後に期待している。その分、我々は学校生活において安全を確保し、見守つてあげなければならない」

「…」

「…正直に言うとお前が彼の近くににいるのは体裁が良くない。仮にお前側に他意が無いらしいとしても、不要な心配をしなければならなくなる。既に生徒達の注目も集め始めてい

る…このままだと、どこぞの保護者から問い合わせが来るかもしれない」

学年主任は淡々と続けるが、表情には幾分か憂いが混ざっているようだった。

無表情で黙ったままこちらを眺めている影斗に、猿渡は身を乗り出して顔を近づけた。

「宮島、頼むからこれ以上波風立てんでくれ。お前の素行には目に余るものがあり過ぎるが、他生徒に影響がないラインならもう何も言わない」

「……」

「お前と付き合うことだけを言ってるんじゃないんだぞ？ …お前と行動を共にすることとで、お前が付き合ってる他校の生徒が、？城に悪い影響を与えやしないかと心配してるんだ。それだけは避けたい。親御さんに申し訳が立たない」

いつもの強面は鳴りを潜め、懇願するような表情で自分に訴えかける猿渡を見て、黙ったまま聞いていた影斗は、やがて小さく息をついた。

「…わーっつたよ。もう会わねえよ」

「！ 宮島っ…」

影斗の返答に感嘆の声をあげる猿渡だったが、横からさえぎるように学年主任がやや眉をひそめながら、机に手を置く。

「念のためだが…？城には何もしていないな？ …よもや手をあげたり、強請ゆすつたりな

んてことは——」

「ねえっすよ。本人に聞いてみりゃいいじゃん」

「……わかった」

ようやく納得したのか、学年主任も表情を戻し、机から離れる。

「もう行つていいですか？」

「おお、いいぞ」

それなりに満足した教諭陣を背に、影斗は会議室の扉に手をかける。が、開ける直前に振り返った。

「……この話、あつちにはすんの？」

「？ いや、お前にしかしないつもりだ。お前の方に話つけておけば、？城からつてことにはならんだろ」

「ああいう出来の良い子は総じてセンチティブなものだ。∴入学してまだ間もないし、こちらとしてもあまり刺激を与えたくはない」

「∴それならいいっす」

「頼むな、宮島！ あ、授業は今後もしっかり出るように」

「へーい」

影斗は退出し、さっさとその場から離れる。

誰もいない廊下を折れると、ポケットに手を突っ込んだまま床を見つめ、深く息を吐き出した。

「…あーあ」

一応場はわきまえるものの、蒼矢にこちらの立場や意図を理解させないままだったので、結構おっぴらにコンタクトをとってきてしまった。教員の目にはつかないよう工夫していたが、生徒達にはどうしても気付かれ、噂される。

…遅かれ早かれ、こうなることは予想ついていた。

それでも実際になってみると、思っていた以上にショックが大きかったことに、影斗は自分でも驚いていた。

「…結構ダメージ喰らうなあ…」

影斗は再びため息をもらしながら、半笑いを浮かべた。

第12話_無自覚に及ぶ余波

裏でそんなことがあった次の日、いつものように少し早い時間に登校し、蒼矢は一人で学校の正門をくぐる。

てくてくと構内を歩いていたが、ふと動きが緩み、やがて中途半端な場所で立ち止まる。

「…」

辺りを見回してみる。まばらに登校する生徒が遠目に見えるくらいで、何も変哲もない景色が広がっている。

蒼矢は一時地面へ視線を落とした後、またすぐに歩き出した。

「……」

そんな蒼矢の様子を、生徒指導・猿渡と一年の学年主任が、彼に気付かれない地点から見守っていた。

「……よし」

何かに納得できたのか双方で頷き合い、その場から離れていった。

やがて昼休みを迎える。

蒼矢はいつものようにコンビニの袋を手に下げ、一年棟を出て校舎外の温室へ向かう。

「？」

温室を視界に捉えたところで何かに気付いて足をとめる。いつも必ず半開きになっている温室の扉が、今日はぴつたりと閉まっている。

少し歩を早めてたどり着き、扉を開ける。中はいつもと変わらず栽培途中の苗がずらりと並び、奥には白いテーブルセットが寂しそうに置かれていた。

「……」

蒼矢はその空っぽのテーブルセットを見つめ、ついでコンビニの袋へ視線を落とす。そのまま少しその場に立ち尽くした後、温室を出て一年棟へ戻っていく。

「あれっ、？城？」

教室へ入りかけると、入り口で蒼矢と同じようにコンビニの袋や弁当箱を手に持った同級生達とすれ違った。

「……もしかして、昼まだなの？ 僕達と一緒に食べない？」

蒼矢が手に持つ袋に気付き、同級生は嬉しそうに声をかけてきた。

断る理由もないため、蒼矢は二つ返事で了承し、彼らについていった。

そんな日が何日も続くと、蒼矢の周囲の動向は少しづつ変化していく。

今までは教室の移動中に二、三声を交わす程度にとどまっていた同級生達との会話や交流が増え、昼休みもいろんな昼食グループから日替わりで誘われるようになる。

入学当初から徐々にその数を減らしていた他クラス・他学年の生徒達からの注目も再び向けられるようになり、勉強会や読書会、部活動などへの勧誘を毎日のように受けるようになる。

：もちろんそれらは全て、影斗が蒼矢に近付かなくなつたことによるものだった。

蒼矢以外に在校生徒との交友関係はほとんど無かつたものの、不良生徒・影斗の影響力は生徒達の間では絶大で、関わることで身の危険を案ずる者、内申に響くことを恐れる者など、彼ら側にも影斗を避けるような風潮があつた。

そして前述通り、生徒の前では交流をオープンにできていたため、影斗の存在が単純に抑止力のようなものになり、蒼矢との距離も置かざるを得なくなつていた。

その”影斗”という籠かごが外れた今の蒼矢のもとには、元々彼と交流したかつた者達が一気に群がってくる。

そしてそこにはやはり、彼の容姿や身体に興味を示す輩も混じっていた。

廊下を一人歩く蒼矢に、手前から上級生のグループが近付いてくる。風紀委員会の先

輩とその友人とわかった蒼矢は軽くお辞儀をする。

「?城、これから次の授業に移動?」

「いえ、戻るところです」

「じゃ、戻る前に俺らの教室寄って行ってよ。ぜひ読んで欲しい本があるんだ」

「はい」

蒼矢の返事を聞き、グループは嬉しそうに少し湧き立った。

左右を囲まれながら、蒼矢は彼らに導かれていく。通り過ぎていく生徒達の注目を浴び、蒼矢はなんとなく気恥ずかしさを感じ、うつむきながら歩く。

「……」

ふいに、横にいた彼らの一人から、するつと腰に手を回された。

蒼矢は一瞬身体をこわばらせるが、見上げることができず、うつむいたまま彼のボディタッチを許してしまう。

ぬる
温い上級生の手のひらが、蒼矢の華奢な身体のラインを探るように、ゆつくりと這い回る。

「……」

言いようもない嫌悪感に襲われながら、蒼矢は黙って口を引き結んでいた。

影斗に蒼矢への接触禁止令が言い渡されてから一週間が経った。

「——最近、また授業フケ気味なの？」

薬品の臭いが充満する化学準備室内で、出前にとった親子丼をかき込む鹿野が、窓際でだるそうに携帯をいじっている影斗に声をかける。

「あー…まあ」

「えーっ、なんでさ？ ついこないだまで頑張ってたのにー！」

鹿野は思わず声高に返してしまっただが、影斗は彼の方へは顔を向けず、スマホで動画を眺めたままだった。

一応登校はしているものの授業時間フルに居ることはなく、中途半端な時間帯に来て空き教室で暇をつぶしたり、今のよう鹿野の元へ来て昼食をねだってそのまま帰ったり、というようなことが続いていた。

ネクタイもいつの間にか再び着けなくなり、まるで数週間前に戻ってしまったかのような影斗の様子に、鹿野は思い切って問いかけていく。

「…？城とは、最近会ってないの？」

「…ああ」

「そうなんだ…なんとなくそんな気はしてたよ。…猿渡先生あたりに何か言われた？」

「近付くなって言われた」

「! ……そっかあ……」

……やっぱり手が回ったか……

鹿野はその予想通りの展開に、息を吐きながら背もたれに身を預けた。

落胆するような鹿野を見、影斗は思うところがあるのか、ぽつぽつと言葉をもらし始める。

「いいんじゃないの？　これで」

「え？」

「……風紀の言うことはもつともだし、俺だつて蒼矢あいつとは釣り合つてないと思つてるし。

……そもそも最初に興味本位で近付いちまったのが間違いだつたんだよ」

「そんな——」

「なにより、学校の事情はどうでもいいにしても、あいつの邪魔にはなりたくねえ」

「……それは、本心？」

「こんなこと、飾つたつて何もならねえだろ」

視線は合わさないままだったが、影斗は落ち着いたトーンで心境を吐き出していた。

鹿野が、少し影斗に寄る。

「……言われたことは、？　城は知ってるの？」

「……いや？　猿渡も伝えないつて言つてたし」

「え…教えないままなの？ 高城の方はそれで大丈夫なの？」

「大丈夫って？」

「だって…その日を境に突然君が会わなくなった訳でしょ？ それは、彼の方でも戸惑ってるんじゃない？」

その意見に影斗の視線がちらつと鹿野へ向くが、すぐにそれで手元に落ちる。

「…別にどうも思わねえだろ。会つてたつたつたつて、いつも大体俺から近寄つてただけだし、あいつから来てたのだって、俺が来いって言つたからだし」

「そうは言つてもさあ…」

「あいつにとつては、俺も自分に近付く某のひとつだよ。…元々学校には、あいつに興味ある奴なんざ山ほどいるんだし、俺だつてそのクチだ。…別に俺でなくても、今度は他の奴らが絡んでくだけで、あいつにとつちや何も変わらねえよ」

手元を見つめたまま、影斗はどこか独り言のようにつらつらと吐露し続けた。
静かに語る彼を鹿野は黙って見守っていたが、小さく息をついて腕を組んだ。

「…そう、かなあ」

…そうでもないと思うけどなあ…

直後、影斗はにわかにも席を立つ。

「という訳で、帰るわ。飯ごちそーさん」

「えっ!？」

彼の言葉に、すっかり冷めてしまった自分の親子丼に視線を移した鹿野は悲痛な表情を浮かべ、ついできっさきと準備室を出ていく影斗に後ろから慌てて声をかけた。

「あつ、ちよつと…ねえ、頼むから授業出るようにしてよ? ちゃんと卒業しようね!!」

「わーっただわーっただ」

扉を閉めて少し歩くと、影斗はふと立ち止まった。

「……」

鹿野の言った“卒業”という言葉が、急に現実味を帯びて影斗の頭の中に降りかかってきた。

…あと一年、こんな状態が続くのだろうか。続くとしたら——

影斗は足許へ視線を落とし、苦い顔をしながら小さく呟いていた。

「退学しちまつた方がいいのかな……」

第13話 少なからぬ心の揺れ

それからまた数日が経ったある日の夕方、自宅最寄り駅改札から歩いて出てきた烈は、やや遠くの前方をブレザー姿の見知ったシルエットが歩いていることに気付き、駆け足で近付いていく。

「蒼矢——」

またしても大声で呼びかけ、振り返った蒼矢へ手を振りながら辿り着く。

ニツと笑う烈へ黙ったまま視線を投げていた蒼矢は、再び向き直って歩き続け、烈も隣について並んで帰路につく。

「今日は割かし早いんだな！ 委員会は無えのか？」

「…ああ」

「そっか！ …あ、聞いてよ！ 俺のチャリ今朝パンクしちゃってて、朝から学校までマラソンでさあ。昼飯なんて全然足りる訳ねえじゃん？ 帰りは友達に頼み込んで金貸してもらって電車乗ってきたけど、もー腹減って腹減って…」

一方的にハイテンションで話し続けていた烈だったが、ふと何かに気付いたのか、蒼矢へパツと顔を向ける。

「!? …なんかお前、食い物持つてんじやねえか…!? 米の匂いがする!!」
「? …ちよつとやめろよ…」

鼻をヒクつかせながら蒼矢の身体に顔を近付けてくる烈に、動揺した蒼矢は咄嗟に通学バッグを胸に抱える。

そのバッグを鼻で探った烈は、屈んだ姿勢のまま蒼矢へ真剣な眼差しを向けた。

「ここに、何か、入ってる!」

「… ああ」

そう問いただされ、蒼矢は思い当たるものに気付いてバッグを開ける。そして手に出された四角いものに烈は一瞬呆けた後、驚きの表情に変わる。

「…え…弁当!」

ポリ袋に煩雑に包まれたタツパーからは確かに弁当らしき匂いがし、烈は目を丸くしながらタツパーと蒼矢の顔を交互に見比べた。

「これ…まさかお前が作ったとか?」

「うん」

「まじかよ、どうしたよ!? …開けてもいい?」

幼馴染の信じ難い行動にますます動揺する烈は、蒼矢の了承を得ておそるおそるその蓋を開け、隙間から中を覗き込む。…途端、中身に目を向けたまま固まった。

「…おい、食ってねえじゃん——」

眉をひそめながら顔をあげると、蒼矢は烈からも箸をつけてない弁当からも視線を外したままうつむいていた。

前髪の間から見えたその泣きそうな表情に、烈は言葉が詰まる。

「……何かあつたのか……？」

そしてさらに数日が過ぎた放課後、その日の授業を終えた鹿野は最終コマを受け持っていた三年クラスの教室を出、業務日報を提出しに職員室へ向かっていた。

他教員らと顔を合わせることに面倒臭さを感じつつ、あくび混じりにダラダラ廊下を歩いていると、三年生らしからぬ小柄な生徒が前方を一人で横切るのが視界に入った。

はたと立ち止まり、交差する方へ消えていくまで目で追った後、何年振りかのダツシユで追いかける。

「たっ……？城！」

鹿野の呼ぶ声に振り返った蒼矢は、ペこりと会釈する。その可愛らしい仕草に胸を撃たれてから我に返り、鹿野はややしどろもどろになりながら続けた。

「ええとっ、僕は化学の——」

「鹿野先生ですよ。存じています」

「あ、知ってるんだ！ さすがだなあ……って、そうじゃなくてっ？」

きよとんとする蒼矢に見守られつつ、鹿野は辺りを見回す。幸運なことに、この場が見えるだろう範囲に生徒及び教員の姿は無い。

内でガッツポーズを決め、鹿野は立ちんぼの蒼矢にずっと近付き、その両肩に手を置いた。

「……丁度良かった、君に頼みたいことがある。化学準備室へ来てくれないか？」

「先生、この器具一式はこちらの棚でいいですか」

「そう、そこでもいいよ！」

蒼矢を伴って足早に三年棟を離れた鹿野は、職員室を無視して別棟にある化学準備室へ戻っていた。

頼みがあると声をかけたものの、単なる口実でしかなかったため準備室へ向かいながら即興で用を考え、丁度授業が続いて少し散らかっていた準備室内の器具棚の整理をやって貰うことにした。

てきぱきと作業を進めていく蒼矢の姿を眺めながら、鹿野はその飲み込みの速さに舌を巻いていた。

「終わりました」

「いや、早いね！ 助かったよ、ありがとう」

蒼矢の整理が終わるタイミングで鹿野はコーヒを淹れ、促された椅子に座った蒼矢にカップを差し出した。

「あはは、こんな劇薬まみれの部屋で出すもんじゃないよね」

「いえ、頂きます」

…あ、飲めるんだ…意外かも。

特に気にする風もなく美味しそうにする蒼矢の姿を見て、鹿野はこの眉目秀麗な優等生に対し思い描いていたイメージとのギャップに、良い意味で虚を突かれていた。

「さつきは唐突に呼び止めちゃってごめんね」

「いえ、大丈夫です」

「…どうして三年棟にいたの？」

鹿野から自然に投げられた質問に、蒼矢はカップから顔をあげる。

「…人を探していました」

「三年生ってことだよな？ 誰、とか聞いてもいいのかな？」

口元に笑みを浮かべる鹿野にじっと見つめられ、蒼矢は少し頬を染めながら視線を外した。

「宮島先輩…です」

「…ああ…」

鹿野は努めて表情に出さないように続ける。

「…残念だけど、宮島は今日は途中で早退したよ」

「そうですか…」

影斗は実際に、例のごとくここ化学準備室で出前を取らせ、腹ごしらえをしてから帰っていつていた。

それなりに事実と近いことを伝えると、蒼矢は少しがっかりしたような面持ちになる。

鹿野は、内で目頭を押さえた。

全然某じゃない。？城の中で重要な人物になってるじゃないか…！

「——鹿野先生は、宮島先輩をご存じなんですか？」

「ああ、うんまあ…担任じゃないんだけど、それなりにね。進路相談とか、生活指導とか…少しだけ。…ほとんど聞いてくれないけどね」

「そうですか」

「…彼に何の用だったの？」

「！…いえ…様子を見たかったです」

鹿野に振られると、蒼矢は再び頬をうつすらと紅潮させ、そうぼつりと答えた。

彼の返事を聞いた鹿野は、さっと立ち上がった。

「そう！ なら宮島はいないことだし、君ももう帰りなさい。委員会とかもないんでしょ？」

「あ、はい……」

立ち上がった鹿野を見て蒼矢も席を立ち、二人で準備室の入口へ向かう。

扉に手をかけたところで止まり、鹿野は蒼矢へ視線を落とした。

「……入学したての一年生が、三年棟あそこに一人で来るのは頂けないよ。ましてや君は風紀委員なんだから。……もう少し自覚を持たないとね」

「……………」

蒼矢は大きな目を見開いて、鹿野を見上げる。ついで耳まで紅く染め、頭を下げた。

「はい、すみませんでした……気をつけます」

そしてもう一度顔を上げ、鹿野をまっすぐ見つめる。

「……鹿野先生、ありがとうございます」

そう言うのと二度目のお辞儀をし、鹿野に見送られながら準備室から離れていった。

室内に戻った鹿野は、扉に背をもたれる。

「ちよつとキツク言い過ぎちゃったかなあ……」

先ほどの自分の言い草に後悔するも、鹿野はなんとなく手応えを感じていた。

…こちらの意図も理解してもらえたみたいだし、この先の行動の抑止力にもなっただろう。

？城側の安全は確保できたはずだ。

…多分大丈夫。

第14話 踏み出す一歩

その日影斗は、化学準備室で昼食をとった後学校を出、夕方までネカフエで漫画やネトゲで時間をつぶし、頃合いを見て泊まる友人宅へ向かっていた。

最寄りのよく行くコンビニへバイクを止め、店内へ入りかけたところで、見覚えのある色の薄いツンツン頭が車停めに座り、こちらを見上げているのに気付いた。

「…烈…」

「よー」

影斗の目線がこちらに向くと烈は立ち上がり、ニツと笑ってみせる。

「おー、しばらく振り！ すげえな、またココでかよ」

「…ココで待つてれば会えっかなと思つてき。待たせてもらった！」

「は？ 今日偶然じゃねえの？」

「うん、偶然じゃねえよ」

呆けた顔をする影斗に、烈は笑顔を見せつつも、真剣な視線を向けていた。

「エイト、ちよつと話さねえか？」

二人はそのままコンビニの駐車場隅へ移動する。

影斗が買ってあげた紙カップコーヒーを烈へ手渡すと、二人並んで縁石に腰かけた。

「…蒼矢のことなんだけど」

どこか奇妙な様子で烈からコンタクトを取ってくるということは、おそらく蒼矢のことだろうと察しがついていたので、影斗は黙って烈の話を聞いてやる。

「学校で仲良くしてくれてるらしいじゃん？ まあそれは、蒼矢ん家で見たからわかってるけど…でもここんところ急に、学校で顔合わせなくなっちゃって」

「…ふーん」

「思い当たることねえのかって聞いたら」わかんない” って言ってる、理由聞いてみればって言ったら” 会えないから聞けない” って言ってた」

「……」

「…エイトからズラしてんの？」

「ヤー」

影斗の顔を覗き込みながら問いかけるが、そっぽ向けたまま適当に返され、烈は息をつきながら手元へ視線を落とす。

「…二人の間のことだってんなら、俺はもう何も聞かねえけどさ…エイトの方で何か理由があるなら、蒼矢には話してやってくれねえかな。原因がわかればあいつも納得する

だろうし…：わかんねえままだと、なんかお互い気持ち悪いじゃん？」

「…まあ」

「…あいつ結構自分責めがちなタイプでさ。普段あんまりテンション上がったたり下がりたりしねえんだけど、一度ハマるとどんどん悪い方向に考えちまうんだよ。こないだ会った時も、まあ元気無かったんだけど…：弁当作ってきててさ」

「…弁当？」

「うん。俺が知る限りあいつが自炊してるのなんて初めてだったんだけど…：全然食ってねえまま持って帰ってきてるのよ」

「……」

言葉を重ねる烈に、そっけない風だった影斗がやや驚きの混ざったような表情を向ける。

「あんまりはつきりとは言ってなかったけど…：弁当は口実なだけで、避けられてると思ってるから気を引きたいんだと思う。…蒼矢はエイトと会って話したいんだよ」

そう言うのと、烈は影斗の方へ向き、頭を下げた。

「…あいつの中で、エイトはもう大事な先輩になってるんだ。あいつの気持ち、汲んでやってくれねえかな。…頼むよ」

烈のつむじを眺めていた影斗は、我に返ったように顔に手を当てた。

「…蒼矢、俺のこと何も言っただけだったのか？」

「ん…特には。ただ、自分が知らない内に何かしちやっただのかもしれないってもらしてた」

「……………」

影斗はその言葉に、決意を決める。烈の肩に腕をかけ、ぐいっと引き寄せた。

「…悪かった…蒼矢にも、お前にも。ちゃんと話してくる」

「…うん！」

真剣な影斗の面差しに烈は嬉しそうに笑って返し、みずからも影斗の腕に手をかける。

「蒼矢さ、見た目小さめであんなだけけど、中身割と強いから。正直に話してやってな、きつと受け止められるから」

「…わかった」

影斗は烈の肩を叩いてから、素早く立ち上がる。

「学校戻ってくるわ。まだいるかもしれないねえし」

「おう！俺またエイトの飯食いたいな」

「いくらでも作ってやる。今度三人で遊びに行こうぜ」

「了解！」

烈に見送られ、影斗はバイクへ駆け寄り飛び乗った。

影斗と烈の再会から少し時間が戻る。

鹿野から帰宅するよう促された蒼矢は、素直に学校を出、帰りの電車に乗っていた。

「……」

影斗と会えず、意を決して動いてみたその結果鹿野に諭され、蒼矢はひどく落ち込んでいた。

…何やってるんだろう、俺…

ドアポケットの壁に寄りかかり、ぼーっと車内を眺める。

すると、何気なく見ていた視線の先に、電車の経路図が映る。

「……」

蒼矢を乗せた電車はそのまま自宅最寄り駅を過ぎ、どんどん景色が変わっていく。

そして、とある駅に降り立つ。家から比較的近くはあるが、用が無いし人の往来が多過ぎるのが苦手で普段からあまり寄りつくことがなく、少し前に久々に降りた駅だ。

数日前影斗と遊びに来た時に使った、大きなターミナルを擁するN駅だった。

蒼矢は複雑な駅構内で少し迷い、つも目的の改札口を見つけ、駅から離れていく。

影斗に連れて行ってもらった時は終始ついていくだけだったが、なんとなく覚えてい
る道順と景色を頼りに、周囲を見回しながら歩いてみる。

そのうち、あの日立ち寄ったショップを見つけることができ、そろっと入ってみる。
声をかけてくる暇そうな店員に愛想笑いをしながら、蒼矢は店内を見て回る。

ひと通り確認し終えたとササッと退店し、再び周囲を歩く。

もしかしたら、影斗がどこかで買い物をしているかもしれない。

この辺りを歩いていれば、フラついていた影斗とバツタリ会えるかもしれない。

そんな確証のない期待を込めながら、蒼矢は影斗との足跡を辿っていった。

しかし、そこからまた少し歩いて三軒目に入店しても何の収穫も得られないまま、た
だ時間が過ぎていった。

店を出たところで蒼矢は軽くため息をつく。

やっぱり帰るかな…と思いかけた時、道路を挟んだ対向の歩道を見覚えのある人物が
歩いていくのが視界に入った。

「……」

諦めかけていた気持ちを再び元に戻し、蒼矢は早足で近付いていく。

「……あのっ」

蒼矢が呼びかけたのは、影斗と遊んだあの日に知り合い、一緒にこの近辺を歩いて

回った女子大生二人組だった。声を掛けられた二人は振り返ったものの、不思議そうな表情をしながら蒼矢を眺めている。

「この間はとも…、ちよつと聞きたいことがありました」

「？」

女子大生達は、さもこちらを知っている風に話しかけてくる目の前の中高生らしき男子に怪訝な顔を向けていたが、次第に口が開き、目が大きくなっていく。

「…もしかして…ソウヤくん!？」

「! あ、はい」

「ええー!？」

女子大生達はあの日の記憶に残る蒼矢と今日の前にいる彼とを照らし合わせるように、蒼矢の顔をまじまじと見つめる。

声色と眼鏡の向こうのパーツでようやく判別できたようだが、ビジュアルが自分の覚えていたそれと違い過ぎて、ただ信じられないという表情を浮かべていた。

「そうだ…よく見れば確かにソウヤくんだわ…！」

「びつくりしたー! ごめんね、全然わかんなかったよ。すごいね、すごいギャップ！」

「はあ…あ、あの」

「ああ! で何だっけ、聞きたいことだっけ？」

「はい。今日この辺りで影斗先輩を見かけませんでしたか？」

「エイト？」

蒼矢の質問に、女子大生達は少し考える素振りをした後、首を横に振った。

「…うん、見てないよ」

「私達今日は午後授業無くて、昼過ぎからずっとこの辺にいるけど、まだ会ってないなあ」

「…そうですか」

蒼矢の少し気落ちしたような反応に、女子大生達は顔を見合わせる。

「探してるの？」

「何か大事な用？」

「いえ…会えればいいなと思っただけなんです。すみません、ありがとうございました」

そう言い会釈をして、あっさり二人から離れていこうとする蒼矢を、慌てて女子大生

達は呼び止めた。

「あつ、待つて待つて。私達も探すの手伝おうか？」

「うんうん、暇だし！ エイトの行きそうなトコも少しわかるしさ」

「いえ、大丈夫です。もう少しだけ歩いて、そのまま帰ろうと思います」

「…そう？」

どこか心配そうな表情で見つめる二人に蒼矢は再び頭を下げ、背を向けて歩いてい

く。

女子大生達は、徐々に小さくなっていく蒼矢の姿を、立ち止まったまま呆けた風に眺めていた。

「…見た？ あの制服。T大付属じゃん」

「…だよね。てかさ、つまりエイトもあそこってこと？」

「嘘でしょ？ エイトってそんな頭良かったの…？」

「なんか私今、色々ついていけてないわ…」

銘々に独り言のように感想を漏らす二人だったが、やがて我に返る。

「！ ねえ…ちよつとまずいんじゃない？ こんなところ制服で歩いてたら…」

「うん、やばいよね…どうしよう、追いかけてみる？」

「そうしよつ。…もう、あんな顔させるなんて…エイトの奴！」

第15話「しのび寄る不穩

影斗は急ぎ学校へ戻ると、少し煩雜にバイクを定位置に停め、校内へと駆け入る。

完全なる私服で来てしまっていたためにまばらに帰宅していく生徒達に振り返られながら、ひとまず一年棟をざつと走って回り、風紀委員の会合が開かれる事務棟の一室をおそるおそるチラ見し、ついでいつもの温室や体育館など蒼矢が居そうなところを片っ端からあたつていく。最後に三年棟の職員室を外観から眺め、すぐその場を離れつつ頭をかいた。

「いねえかあ」

「！ 宮島」

立ち止まったところで横から声がかかり、振り向くと職員室から化学準備室へ帰るところだった鹿野が近寄ってきた。

「来るの早過ぎだよー。まだ日付変わってないよ」

「うっせー。鹿野ちゃん、蒼矢見なかった？」

「？城？ だいぶ前に帰らせたよ」

「あー、やっぱりそっか」

どっと疲れが出たのか影斗は大きく息を吐き出しながら、校舎の外壁に背をもたれる。

そんな彼の様子を見、鹿野は腰に手を当てると軽く睨んだ。

「…今日？城、三年棟歩いてたよ」

「！」

「君が会わなくなつたから、いないか見に来てたんだよ。もー肝冷やしたよ！他の先生方に見られてないから良かったけどさ。…ねえ、やっぱり話してあげた方がいいよ。彼だつてこのままじゃ——」

「そのために戻つて来たんだつての」

少し語気を強め、影斗は鹿野に食い気味に返した。

「…言われたんだよ、別の奴にも。…あいつが俺のこと気にしてるみたいだつてのも」

外壁に預けた背を丸め、影斗は地面を見つめる。

「その内まともに付き合えなくなるだろうつてことはわかつてたんだよ。でも、その後のことはあんまり考えてなくてさ…てか、俺から離れてけば自然消滅的に会わなくなるんじゃないねつて、勝手に思つてたんだ」

「…まあ、無責任だよね」

鹿野から真つ当な指摘を受け、影斗は少し顔を上げ、ふてくされたような表情になる。

「責任取るよ、ちゃんど」

「どう話すつもりなの？」

「お前に迷惑かけたくねえから会えませんって言うしかねえだろ」

「君はそれで本当にいいの？」

「…いいんだよ俺の方は。あいつさえ元に戻ればそれでいいだろ」

影斗のトーンが少しずつ小さくなっていき、そんな彼を鹿野が憂いを込めた目で見やる中、影斗の携帯が鳴る。

苛立つ気持ちを抑えながら相手を確認した後、少し表情を平静に戻して電話に出る。

「…おう、何？」

『あつ、エイト？ あんた今どこ？』

この間、蒼矢を交えて一緒に遊んだ女子大生たちからだった。

「ガツコだよ」

『えーっ、学校!? もう、いないと思ったあ』

『何してんのよお、早くN駅来なさいよ!』

「は？ ちよつといっぺんに喋んなよ…」

通話口の向こうでキャンキャンわめく女子二人の声に鬱陶しさを感じながら、影斗は話を聞いてやる。

『さつきN 駅でね、ソウヤくん見かけたの。あんたのこと探してたよ』

『一人で歩き回ってたよ。何か思いつめた風でさ…元氣ないみたいだった』

「…マジで!? どれくらい前?」

『15分くらい経つかなあ。その時は駅戻って帰るって言ってたんだけど…』

『制服のままだったから、危ないなと思って追いかけたんだけど、駅着くまでに見失っちゃってさ。改札通ったかわかんなくなっちゃって』

「……」

『なにしろさあ、早く来てよ! 私達ももう少し探すから』

「いや、お前らはいいいよ、遅くなるから。俺お前らのことまで責任取れねえよ」

『…わかった。じゃあ頼むからね!』

電話を切る影斗の背中を、鹿野は怪訝そうな表情でうかがう。

「…何事?」

「…蒼矢が…N 駅周辺に制服のまま居たって」

「…!!」

鹿野は目を見開き、腕時計を確認する。表情を強張らせる鹿野へ、影斗が振り向く。

「鹿野ちゃん…この場は無かったことにしてくれねえ?」

「…それって、僕にこの事実を見逃させてこと?」

「…頼む、必ず見つけて家に帰すから。…鹿野先生、お願いします」

鹿野は腕を組み、頭を下げる影斗の頭頂部を見やる。

多分彼が自分に向けて頭を下げてくるなんて、出会ってからこれが初めてだ。

「……」

まつすぐ頭を下げ続ける不良生徒を眺めた後、鹿野は目を瞑る。

「……悪いけど、僕も教員の端くれだから、見逃すことはできない」

「……」

「だから、時間はあげる。二時間以内に？城が家に帰りついたのが確認できれば、僕からは報告しない。…それを超えて君から何もなければ、学校と？城の親御さんに連絡する

よ」

「…鹿野ちゃん!!」

「どういう結果でも、必ず僕に連絡すること！…いい?」

「了解、恩に着るぜ!」

鹿野から了承を得た影斗は、一目散に裏門へと駆けていく。

その背中を目で追う鹿野は、一人で小さくため息をついた。

「…まったく、調子いいよ」

第16話 牙を向く夜の街

N 駅へと到着した影斗は、行きつけのショップに断つて適当にバイクを停めると、
ぎ蒼矢と遊んだエリアへと走り出す。

—— エイトのこと探してたよ ——

女子大生が蒼矢を見かけた時間からだいぶ経つてしまっている。ここからまだ離れてないと仮定して、彼が自分との足跡を辿っているとすると、おそらく今はもうこの近辺にはいないだろう。

とりあえずあの日寄ったショップのある通りを抜けつつ、駅から最も遠いビリヤード場へ行つてみることにする。

足を進める度に辺りが薄暗くなっていく。繁華街は刻一刻と“夜”に向かっている。

この辺りに不慣れな学生がひとりで制服で歩いているとなると、何らかの勢力に捕まるのは時間の問題だ。

可能性としては、不定期に不特定箇所を張っている警ら。

あるいは、適当にフラつきながら弱者をカモにする不良連中。

影斗の脳裏に、それら危惧が津波のように押し寄せる。そんな不安感を振り払うよう

に影斗は頭を振ると、方々を確認しながら遊技場を一路目指した。

「！ おー、エイト！」

駆けていると、丁度路地裏のライブハウスから出てきた男に声をかけられた。

こんな時に…と若干苛立ちを覚えながらも、現状を気取られるのも面倒に思い、ぴたりと止まって振り返る。ギターケースを背負ったバンドマンらしき男は、緩慢な動作で影斗に手を振っている。

「久しぶり。なに、何か急いでんの？」

「いや？ ちよつとこの先の店に忘れ物。お前は？ ここのライブハウス使ってたっけ？」

「いや。いつものところは使えなくなっちゃったからさ。…その件で聞いてくれよー」
長くなりそうだ…とげんなりする影斗だったが、仕方なしに彼の話を聞いてやる。

「いつものとこでき、あいつらが暴れたんだよ、さつき」

「あいつらって？」

「ダイキ達だよ、R高の」

「…！」

「マスターに俺達にも使わせろって言ったり、使用料が高いつて詰め寄ったりして、しまいにマスターキレちゃって。しかもあいつら俺の紹介で来たとか勝手に言っって回って

たみたいで、こっちにも飛び火してきてさ、俺もあそこ使えなくなっちゃったんだよ」
バンドマンは、しよげた風に肩を落とす。

「あいつらがこの辺うろつくようになってから、どこも居辛くなっちゃったよな」

「…そうみたいだなあ」

「最近じゃ、ますます調子づいちゃってるんだぜ。…エイト、あいつら何とかしてよお」

「はあ？ 俺にどうしろつてのよ」

「えー？ だって、お前喧嘩強いって聞いたからさあ。でも最近ご無沙汰だったみたいじゃん？ だからあいつらもお前がいる間は大人しくしてたんだらうって、皆そう言うてるよ」

「…どこの風の噂だよ。誰も構わなきやあいつらもその内飽きるんだから、しばらくほっとけ。…残念だけど、今回は諦めろ」

「…わかったよ。エイトも今日は気いつけるよ、居るからな」

「了解」

不満気だが一応納得したバンドマンと分かれ、影斗は先を急ぐ。

蒼矢といるところを遭遇した、あのR高の連中が、今日もこの近辺をうろついている。危惧すべきことが増えてしまい、影斗は内で頭を抱えた。

…頼むから、鉢合せないでいてくれよ…！

その頃蒼矢は、あの日影斗と最初に行った遊技場前にたどり着いていた。

女子大生達には帰ると言ったものの、やはり後ろ髪引かれるものがあり、N駅周辺をしばらく歩き回っていたのだ。遊技場は、巡った場所の中では最も駅から離れていて、辺りを確かめながら歩いていたら、いつのまにやらだいたいぶ陽が傾いてしまっていた。

何度目かの期待を込めながら恐るおそる店に入り、すぐ落胆しながら退店する。

「…今日は、先輩はN駅にはいないんだな…」

そう小さく声を漏らすと、蒼矢は顔をあげる。そして気がついたように、辺りの景色をしつかりと視界に捉える。

「……」

すっかり暮れた夕闇の中、乱雑に並ぶ繁華街の看板の明かりがひとつひとつ灯つていく。

立ち尽くす路地裏からメインストリートを眺めると、街灯の光を浴びる黒い人影が、左右に何度も行き交っていく姿が目に入る。

ミニ丈のワンピースから惜しげもなく生足を見せつつ、ヒールを小気味よく鳴らして歩く若い女達。

何事か大声で笑いながら、群れをなして通り過ぎる体格のいい男達。

N 駅は、昼間の様相から少しずつその姿を変え始めていた。

ふと背中に緊張が走り、蒼矢は肩の通学バッグをかけ直す。

…帰らなきゃ…

ひとまず人通りの多い方を目指して、メインストリートへ歩を進める。

前方から路地裏へ入ってきた集団が目に入り、蒼矢はすれ違おうと端を歩く。が、目の前へ塞ぐように立たれた気配を感じ、うつむき加減だった彼は顔をあげる。

「はい止まってー。通行料」

「？」

「ココ通るの、俺らの許可制だから。一万円出して」

眉をひそめながら、蒼矢は目の前の男を見上げる。いつの間にか、影斗ほどの背格好の男達三、四人が囲うように距離を詰めてきていた。体格差に気圧され、ビルの外壁に追いやられる。

男達はニヤニヤ笑いながら、蒼矢へ向けて手のひらを差し出すように振ってくる。男達の後方にはもう一人男がいて、集団から少し離れ、ポケットに手を入れたまま真顔でこちらをじっと見やっていた。

「早く出せよ、一分毎に超過金千円」

「出しません。公道で市民が通行料を取るなんて聞いたことはありません」

「はあ……？」

大人しく即金を渡してくるか泣いて許しを乞うてくるかとたかをくくっていた男達は、蒼矢に毅然とした態度で断られ、やや面食らったように呆けた声を出す、ついでぎやははと笑い出した。

「じゃーもう何でもいいよ。金出せよ。ほら、財布」

「あいにく持ち合わせてないので、お断りします。…通して下さい」

「…お前本気で言ってるの？ さすがに笑えないよう？」

彼らの顔から笑顔が消え、真正面に立つ男が胸を押す。突き飛ばされた勢いで蒼矢は背中を側壁に打ちつけ、よろめいたところを衿を掴まれ、強引に引き寄せられた。

「っ……！」

「？ ……なんかこいつ、妙に顔可愛くねえ？」

「は？ ……ホントだ」

蒼矢の容貌に気付いた男は、掴んだまま顔をまじまじと見、上から下まで眺め始める。目くばせされた周りの連中も彼の顔に見入り、若干毒気を抜かれたような表情になる。

「…待って、こいつ本当に男なん？」

「さすがに男だろ、制服着てるし。…え、これってT大付属のじゃなかつたか？」

「マジかよ、あそこつてめっちゃインテリ集団じゃん！ ええ、この顔で野郎なの!? 結

構信じられねえよ？」

などと蒼矢を困ったまま男達が好き勝手に考察を連ねていると、後方から見ている男が近付き、連中を割って入る。正面に立っていた男をどけると、蒼矢の顔をじっくり眺め始めた。

「ダイキ？」

「…ああ、わかつたわ」

集団の中心人物らしい、その“ダイキ”と呼ばれた男は、口元をわずかににやつかせると、蒼矢の眼鏡を取りあげた。

「お前、この前エイトと一緒にいたやつだろ」

「へ？ ……ええ!？」

ダイキの言葉に、男達は一瞬目が点になるが、眼鏡のない彼の顔を改めて見てすぐに記憶を洗い出せたのか、驚愕の声をあげる。

「えー!? マジ!？」

「マジだ…! あん時のコ、いや…、コ!？」

「どういうこと? なんてあん時とこんな違うの、こいつ」

蒼矢も、ダイキの顔が近寄ってきてようやく数日前に影斗と二人で遭遇した男グループだと思ひ出す。が、影斗の名前が出たところで反射的に察し、口は出さずに見返すだ

けにとどめておくことにする。

銘々に感嘆したり混乱したりと騒がしくなる男共を尻目に、ダイキは依然蒼矢をじつと観察し続けていた。

「…なんか引つかかんねえか？」

「？ 引つかかるって？」

「あん時の、こいつに対するエイトの態度がさ。なんとなく庇つてたような気がしたんだよなあ…だから勘違いしたわけよ。でも、こいつが男だったらあの態度はおかしくね？」

「…確かに。あいつがすげえ女好きなのは間違いねえらしいしな」

「じゃあやつば女つてこと…？」

「えー、さっきの声は男な気がしたけどなあ…」

ダイキをはじめ男達の視線が再び蒼矢に集まり、ぞろっと取り囲んだ。

「おい、もっかい声出してみろよ。お前わかりにくいよ」

男の一人が蒼矢に凄み始めたところでダイキが止め、彼に目線を合わせるようにかがんで顔を近付ける。

その、好奇を晒け出して見世物を眺めるような視線に、蒼矢は負けじとダイキを睨み返した。

「名前は？」

「……」

「エイトとどういう関係？」

「……」

「だんまりか。…ちよつと来いよ、嫌とは言わせねえぞ」

第17話「闇色の烈火（R15）」

件のR高の男達に捕まった蒼矢が連れて来られたのは、遊技場近くのとある路地裏だった。

近辺の主たるアパレル系ショップは軒並み廃業し、一階部分から階上や地下の飲み屋に続く雑居ビルの薄暗い入口ばかりが立ち並ぶ袋小路になっていて、人がまばらにしか寄り付かないため、半ば彼らの溜まり場のようになっていた。

明かりの少ないこの暗い空間へ引きずり込まれ、男の片腕で投げるように解放されると、軽い蒼矢の身体は簡単に後方の袋小路へ飛ばされ、よろめいて尻もちをつく。

ダイキは、蒼矢から取り上げた通学バッグの中を確認し始める。中身を手にとっては地面に捨て、財布を広げると舌を出した。

「げー。本当にチャリ銭しか入ってないでやんの」

「…返して下さいー!」

視界の悪い蒼矢は、眼鏡だけでも取り返そうと起き上がってダイキに駆け寄ろうとするが、男の一人に阻まれ、そのまま後ろ手に羽交い絞めにされる。

ダイキは鞆を投げ捨てると、動けない蒼矢に近付いていく。

「見れば見るほど不思議。何でお前みたいな隠キヤッぽいのがエイトと繋がらんのか？」

ダイキは背を丸め、変わらず鋭い視線を向けてくる蒼矢に顔を寄せる。考えを巡らす彼へ、男の一人が鼻で笑いながら口を挟む。

「…顔じゃん？ 下手な女より可愛いし」

「まーそれも考えられっけど。でもこいつ結局男だろ？」

「脱がしたら違ったりして」

別の男がポロリと漏らしたその言葉に、身の危険を感じた蒼矢は逃れようと身をよじり出す。

「！ あ、このっ暴れんなっ…」

その様子に、ダイキは何か思いついたように自分の携帯を取り出した。

「おい、ちよつと持ってるよ」

「？ 何？」

「こいつ、写真撮れよ。動画がいいや」

そう隣の男に携帯を渡して指示を出すと、ダイキは蒼矢のすぐ目の前に立つ。

「こいつがエイトの特別な何かだっことは確かだ。あの時のあいつの態度からして間違いない。…つまり、こいつはエイトの弱みになるかもしれねえ」

「…ダイキ?」

「こいつ脱がして動画撮って、エイトに強請りかける。…ついでにこいつが本当に男かどうかも確かめてやろうぜ」

ダイキのその台詞に、呆けていた周りの男達の顔色が徐々に変わる。

「え…」

「…ダイキ、それマジで言ってるの?」

「マジだよ。…この辺の連中、二言目には決まって”エイト”って言いやがる…イケメンだか何だか知らねえが、最初会った時から気に食わねえ奴だった。弱み握っておけば顔広いあいつも大人しくなるだろうし、そうすりゃあとは雑魚だけだ。Nは俺らが乗っ取る」

「…下らない」

「あ?」

男の手により固く拘束される小さな身体から漏れた声に、ダイキは片眉を上げる。うつむく前髪の隙間から、蒼矢は鋭い視線を彼に注いでいた。

「あなた達の下らない理想に巻き込まれる影斗先輩は、言われのない被害者だ。…そんな馬鹿げた脅迫をしようとするあなた達に抵抗できない俺は、先輩に謝らなければならぬ」

「……」

ふいな獲物の口上に沈黙した後、ダイキは蒼矢の髪を掴みあげた。

「っ……!!」

「……とりあえずお前が男だつてことは確定したわ。そこまで腹が決まってるんなら、剥かれたところで痛くもかゆくもねえよなあ! ……そうだろう?」

ダイキは目を見開きながらそうまくし立て、脇の男に目で指示を送る。指示を受けた男が蒼矢のブレザーのボタンを外して前を開けると、ネクタイに指をかけて弛め始める。

「やめろ!! 触るな!!」

蒼矢は悲鳴に似た大声をあげ、男の手の中でもがく。

「おい、口塞いどけ。そっちちゃんと撮ってるか?」

「お、おう……!」

ダイキは指示を送りながら自分も蒼矢の下半身に手を伸ばし、ベルトのバックルを外してシャツの裾を引っ張り出す。

「んー!!」

「あんまり俺ら画角に入れんなよ、ネットに上げるってなったら編集面倒だからな。…おい、しっかり押さえてろよ」

「わかってるよ、あ、うわ」

暴れる蒼矢の足が押さえつけている男の足の間に入り、バランスを崩した男は蒼矢を地面に取り落とす。

背中から倒れた蒼矢は、地面に頭を打ち付ける。

「っ……」

一瞬動きの止まった身体から力が抜け、それきり動かなくなつた。
仰向けに寝転がる彼を男達は囲い、真上から眺める。

「…動かなくなつちまつたぞ」

「頭打つたんじゃねえか…?」

「…やばくね?」

「……」

ざわつく周囲と同じく若干動揺したダイキだったが、身をかがめ、再び蒼矢に手をかける。

「続けるぞ。もう少し近くで撮れ」

「えっ、続けんの? …こいつこのままで?」

「……ここまで来て引き下がれるわけねえだろ!」

怖気づく男の一人に投げやりにもとれる口振りですと、ダイキは蒼矢のシャツのボ

タンに触れる。隠せない動揺で指先が震え、煩わしくなり思い切ってシャツの前を引き裂く。

そうして現れた彼の上半身にはたとダイキは手を止め、目を見開いて少し身を引いた。

撮影するスマホのライトの中で浮かび上がる、肌理きり細かな白い肌としなやかな腰のライン。柔らかな弾力を感じさせる程よく締まった腹部。淡いピンク色の小さな乳首と華奢なデコルテ。そして、細い首からつながるどこか中性的な面差し。

その、美麗で艶やかな上半身が、背徳感を抱えた男達の目の中に飛び込んできた。その場にいた全員が、思わず息を飲んでいた。

「…すげえな」

「男…なんだよな…?」

「…俺、勃はっちゃった」

周りがぼつりぼつりと本音を漏らす中、ダイキは意を決して蒼矢のズボンのファスナーに手をかける。

「…いいな? 撮とってるな?」

「…っ…おう…」

カメラ係の男が、震える手で携帯を構え直す。と、するつと手から携帯が抜かれ、視

界から後方へ消えていく。

「あ?」

呆けた声を出しながら後ろを見た男の息が止まる。振り返った先には、街灯の逆光を浴びた黒髪とバイクジャケットが闇に消え、片耳に下がるフープピアスと眼光だけが浮き上がっていた。

「…え、エイ、ト…」

消え入りそうなその途切れ途切れの声に、R高の連中が一齐に振り向く。彼らの視線を浴びる中、影斗は黙ったまま取り上げた携帯の中身を確認すると、彼らを一瞥する。

「——お前ら、何してんの?」

「……」

沈黙したまま返答できない彼らの間から、後方に半裸で横たわる蒼矢を見る。傍らには蒼矢のズボンのファスナーを指でつまんでいるダイキがいて、彼もまた影斗の方を凝視したまま固まっている。

その光景をじっと眺めると、影斗は再び口を開く。

「…俺のツレに何してくれちゃってんの?」

真顔で問いかける影斗の語尾に、幾分か力が込められる。

「…っエイト…ちよつと待って、落ち着けっ!」

「っこれはなんていうか、興味本位というか…さ…、てか、勘違いさせたお前が悪くねえか？ か、彼女だっと思って思うじゃん？ あんなん」

「そ、そうそう！ だから確かめてみたくなった…みたいなさあ」

彼から滲み出す激しい怒気を浴び、我に返った男達は引き腰のまま数歩後ろに下がっていく。

影斗は蒼矢の動画が収まった携帯を両手で持つと、ミシツと音を立てて真つ二つに折り曲げる。

スマホだったものを足元に投げ捨てると、漆黒の両眼で彼らを睨んだ。

「——お前ら、覚悟出来てんだろうな？」

第18話「背にかかる後悔

「……」

身体に一定間隔の揺れを感じ、蒼矢は目を覚ます。

後頭部に重い痛みを覚え、朦朧とする意識の中、温かな人の体温がわずかず感じられてくる。静かに息をする中、最近よくかぐようになった香水の匂いと、それに混じる煙草の臭いが伝わってくる。

「……え……と、せんばい……?」

「! ……おう、起きたか?」

あの場を制した影斗は即刻蒼矢を背負い、彼の自宅へ向かっていた。

意識が戻ったことに動揺したのか影斗は思わず足を止めるが、すぐにほっとしたように息をついて、再び歩き出す。

半開きになっている蒼矢の目には、暗がりだが覚えのある景色が映り、影斗の歩く速さでゆっくりと横に流れていく。

「…悪い、交通手段俺の足しかなくてさ。…あと少しで家着くから。もうしばらく辛抱してろな」

「……眼鏡……」

「! ああ、心配すんな。眼鏡も鞆も全部ちゃんと拾つといたから」

「……」

影斗の肩からだらりと垂れ下がっていた蒼矢の腕に、少しだけ力が込められた。

「…先輩…」

「何だ？」

「…すみませんでした…ご迷惑をおかけして」

「!? 何言つてっ…、…何でお前が謝るんだ…」

思わず声高になつてしまいそうになり、影斗はなんとかこらえて言葉を返す。

蒼矢に先に謝られてしまったことに、影斗は激しく後悔した。

「違うんだよ蒼矢、あのさ…」

「…先輩、」

「ん、ああ？」

影斗は口を開きかけたが、蒼矢と被つてしまい、思わず言葉が引つ込んでしまう。

「…俺、先輩のこと探してたんです。…急に先輩と会えなくなった気がしたので…」

「…あ、ああ…」

「…先輩と会えなくなつて…、自分から先輩に会う手段が無かつたつて気付いたんです。」

…いつも先輩から声かけてもらっただけだったんだって…。だから…Nあそこ駅なら、行けば会えるかもって思っただけ…」

「……」

蒼矢はか細い声で、途切れ途切れに自分の思いを吐露し続けた。結局聞き役に徹せざるを得なくなった影斗は、ゆっくり紡ぎ出される彼の言葉に、黙って耳を傾けた。

「…でも、かえって先輩の手を煩わせてしまいました。俺ひとりじゃ先輩を探し出すことも…あの人たちから逃れることも出来なかった…」

影斗は、自分の行いの自分本位さ・身勝手さをかえりみて、ただひたすら自責の念に駆られていた。

…お前には何の非もない。俺がお前に理由も言わないで、勝手に会わなくなったただけなのに。

…今日だって、俺がちゃんと説明してれば、お前がこんなになることなかったのに。

「俺に…先輩の気に入らないところがあるなら、直しますから…、離れていかないで下さい…」

「……」

「……俺、先輩の後輩でいたい…です…、…」

言いながら徐々に声がか細くなっていき、蒼矢の腕から力が抜けていく。

肩に落ちた頭の感覚に、影斗は無音になった夜道を立ち止まる。

彼の自分への思いが、背中にかかる身体より数倍重く心に被さってくるようだった。

「……」

ぎゅつと、奥歯を噛みしめる。

影斗は蒼矢を背負い直すと、再び彼の自宅へと歩き始めた。

……俺は、お前と出会うべきじゃなかったな…

翌日、影斗は朝から学校へ行く。

約束通り二時間以内に蒼矢を見つけて家に帰り、顛末を連絡していたので鹿野が各所へ報告することはなかったが、みずから猿渡にコンタクトを取り、事情を説明した。

報告を聞いた猿渡は、驚愕の表情を見せた後がつくり頭を垂れた。R高へは猿渡經由で学校から話が行くことになり、相手方との事実関係が認められ正式な処分が下るまで、影斗は自宅待機となった。

事実上の停学処分である。

影斗は猿渡へ説明する中で、蒼矢の話は一切出さなかった。

猿渡への報告を終えると、影斗は化学準備室へ寄った。

室内へゆつくりと入ってきた彼に鹿野は柔らかく微笑むと、いつものようにコーヒー

を差し出す。

鹿野は、影斗から連絡を受けた時にことの次第も軽く聞いていて、影斗の形なりを心配気にうかがう。

「…昨日はお疲れだったね。怪我は？」

「ねえよ。…ありがとな、鹿野ちゃん。色々」

「いや、僕は言った通りにしただけだよ。見つかつて良かった。…？城は？」

「…頭打ってるみたいだったから、あいつの知り合いに病院連れて行ってもらったよ。

…今日はガツコは休んでんじやねえかな」

烈の連絡先を聞いていた影斗は、昨晚蒼矢の家へ着く前に烈を呼び出して自宅前で待機してもらう手はずを整えていた。

乱れた様相で戻った二人を烈も烈の両親も仔細は聞かずに黙って受け入れてくれ、蒼矢はそのまま手渡されて病院へ直行となった。

影斗の返答を聞いて鹿野はひとつ頷くと、頬杖をついて彼を見る。

「…停学？」

「ああ」

「いつまで？」

「…言われてねえからわかんねえ。処分待ち」

「……」

二人の間に一時沈黙が降りた後、影斗はゆっくりと席を立った。

「じゃ、俺自宅待機だから。帰るわ」

「……うん」

そう軽い口調で言うと、影斗は普段通りの足取りで鹿野を横切り、ゆっくりと入口へ歩いていく。

鹿野は黙ったまま視線だけ彼を追い、その背中を見送る。

扉を開けながら、影斗は鹿野へ振り返った。

「……めん鹿野ちゃん。俺卒業できねえかも」

そうポツリと漏らし、化学準備室を後にした。

「……」

鹿野は影斗が消えていった入口をしばらく眺め、深く息を吐き出しながら床へ目を落とした。

第19話「小さくも、大きな存在」

三日後、久し振りに自宅へ帰って大人しく謹慎していた影斗は、クラス担任の教員から連絡を受けて登校することになった。

次に学校へ行く時はおそらく退学を言い渡される時だろうと思っていた影斗は、予想外の早い呼び出しに半信半疑になりながらも学校へ向かう。

生徒指導室へ入ると、担任と三年の学年主任、そして先日事情聴取を受けた猿渡という豪華メンバーで、影斗を待ち受けていた。

「処分決まったんすかあ？」

促されて座った影斗は軽いトーンで猿渡へ話しかけるが、猿渡は不機嫌そうにじろつと睨み返す。

「…黙ってろ！」

「へーい」

よく見ると、室内に集まった教諭陣はいずれもどこか浮かない顔をしている。ふざけられない雰囲気を感じ、影斗は言われた通り黙って、少し肩をすくめた。

猿渡はこめかみに手を当て、深く息を吐き出しながら口を開いた。

「——宮島、お前の処分だが…一週間の停学だ。今日までの自宅待機の日数を合わせて、来週の火曜まで。いいな？」

「……え？」

「なんだ、不満か？」

「あ、いや…」

言い渡された処分にはぼかんとまっている影斗に、猿渡はじろりと視線を向ける。

「この件の別の当事者から言質が取れた。…それを踏まえた上での今回の処分だ。理由はどうかあれ、他校生との暴力沙汰は捨て置けんからな」

猿渡が話す途中後方でドアが開く音がし、一年の学年主任が視界に入ってくる。

その姿を追い、何かを察したように目を見開いてこちらへ視線を戻す影斗に、猿渡はため息をついた。

「…休んでた？城が昨日、大体の事情を話した。全くお前は…R高相手方に再確認する羽目になったわ、手間をかけさせて…！」

二の句が継げず、視線を下げて沈黙してしまった影斗を、一年の学年主任はどこか冷たい表情で見下ろしていた。

「…お前は退学するつもりだっただろうし、我々もそれを望んでいたが、お互い当てが外れたな。…随分と仲良くなったもんだ」

「……」

「…どうにせよ、今回の件は彼にも咎がある…？城は、昨日付で風紀委員を解任した。が…元を正せば、この処分はお前が引き起こした顛末だということを忘れないように」

そう言い捨てると、一年の学年主任は先に退室していく。

うつむいたままの影斗をうかがいつつ、猿渡は残った教員たちにアイコンタクトを送った。

「…以上だ、今日は帰って良し。引き続き粛々と謹慎しているようにな。課題も出すからやれよ、ちゃんと！」

登校することを鹿野に伝えていたので、影斗は帰りがけに化学準備室へ寄った。

扉を開けると、鹿野が入口で立って待っていた。心ここにあらずという風な表情の影斗を、彼はいつも通り笑顔で迎え入れる。

「やあ、お疲れ様。どうだった？」

「…来週まで停学だったさ」

「あら、良かったじゃない。…彼も喜ぶと思うよ」

そう言うのと、鹿野は視線を室内へと向ける。それに導かれるように影斗も室内奥を見ると、窓際に眼鏡をかけた小柄な生徒が座っていた。影斗と視線が合うと立ち上がり、

ぺこりとお辞儀をする。

「…蒼矢」

「じゃ、僕は一旦出るね。…(こ)ゆっくり」

そう言うのと鹿野は影斗の肩に手を置き、準備室から出ていった。

二人きりになった室内に、沈黙だけが流れる。

いつものように何か軽く言葉を発したいのだが、影斗は言い淀んでしまっていた。

自分の中で思い描いていた”今日”のストーリーが変わってしまった、真正面に立つ蒼

矢へどういう表情を向ければいいのかわからなくなっていた。

蒼矢はそんな彼を同じく黙って見つめていたが、やがて口を開く。

「…せんば…」

「!!」

が、その呼びかけを聞いた瞬間、影斗は遮るように手のひらを蒼矢へ向けた。

…今度こそ、蒼矢からしやべらせちやいけねえ…!

「…っ…、頭、大丈夫か」

「! あ、はい…病院で検査を受けましたが、初見では何も。今診断待ちです」

「…痛むのか?」

「…少し」

「そっか…」

変わらず静かに視線を注いでくる蒼矢によく影斗は目を合わせ、頭を下げた。

「…ごめん。頭の怪我のことも、連中に絡まれちゃったことも…全部俺のせいだ」

「……」

「…風紀委員辞めさせられたことも、さつき聞いた。…本当にごめん」

いつもの軽い調子は鳴りをひそめ、抑え気味のトーンになっている影斗の言葉を受け止めてから、蒼矢は少し息をついた。

「いいんです、それは。風紀委員は、元々先生方の薦めで頂いたお役だったし…自分で納得して就いたものではなかったのです」

「いやでも、お前の経歴に傷がついちまったっていうか…怪我だって、俺といなきやそんなもんしなくて良かったじゃ——」

「先輩、俺があなたから聞きたいのは、そういう言葉じゃないんですが」

慌てた風に並べたてる影斗をぴしやりと制し、蒼矢はうって変わってじとつと彼を見る。

「…先輩が先生方に言われて俺に会えなくなっただこと、何で話してくれなかったんですか?」

「…!」

「昨日、鹿野先生が声をかけて下さって…そこで理由を初めて知りました」

驚いた風に見開く影斗に、蒼矢は淡々と続けた。

「…確かに先輩と知り合つてなかつたら、あの日…あんな風に巻き込まれてなかつたかもしれません。けど、そもそもああいふ所へ制服のまま行くことはモラルに反しますし、暗くなる前にさっさと帰るべきだったんです。…俺の不注意以外のなにものでもありません」

「…お前…」

「…少しずつ理解していったんです。ああいう繁華街で遊ぶ先輩と自分とでは、だいぶ温度差があるつて。だから、どこかで線引きしないといけないと思つていました。…でも、それを伝える前に先輩は離れていつてしまつた」

影斗は、まっすぐ見据えてくる蒼矢の大きな目に釘づけにされ、黙つたまま息を飲んだ。

「…こう見えて結構怒つてるんですよ？ 先輩は気を遣つて下さつたのかもしれませんが、大事なことを隠されてまでそんな風に扱われたくありません」

蒼矢は、影斗へゆっくりと近付いていく。

「俺、大変傷つきました。…頭よりも、こころが」

そう言いながら自分の胸に手を当て、その仕草を呆けた顔で眺めている影斗へ向かつ

て上目遣いに見つめると、やや悪戯気に微笑^わった。

「…どう責任取ってくれるんですか？ 影斗先輩」

…こんなん、どこをどうやったら惚れずにいられんの？

第20話 確かになる絆

週が明け、停学が解けて早速登校した影斗は再び生徒指導室へ向かう。

待ち受けていた猿渡は今日も難しい顔をしながら座っていて、影斗が対面に座るとじろつと睨みつけた。

「——ちゃんと家に居ただろうな？」

「心配しなくても居たつすよ。居たくなかったけど」

「課題は」

「さつき出した。ね？」

影斗に振られ、同席していたクラス担任の教員は猿渡へ向けて、ややあわてた風に首を縦に振ってみせた。

「宜しい。今後についてだが——」

そんな頼り無さ気な担任が後方から見守る中、猿渡の口から影斗への校外を含めた素行についてガイドラインが言い渡される。影斗は頷きながらも右から左へ受け流していく。

「——以上だ。守れよ、ちゃんと！」

「はい」

やや間延びした返事をする、影斗は表情をがらりと変え、猿渡を凝視した。

「? ……何だ?」

「…こんな立場からいうのもなんんだけどさ…頼みがあるんだけど」

眉をひそめながら視線を返す猿渡へ向けて背筋を伸ばすと、影斗は頭を下げた。

「?城 蒼矢…君と、付き合いを続けさせて下さい」

今まで頭を悩みに悩まされてきた不良生徒の急な折り目正しい態度と懇願に、猿渡は少し目を見開く。

「もう危ない目には絶対遭わせないし、遊びにも誘わない。…ガツコの中だけでいいから、会わせて欲しい…です。お願いします!」

机に額をつける勢いで頭を下げ続ける影斗を、驚いたような表情で眺めていた猿渡だったが、やがて平静に戻り、椅子に背を預けて腕を組む。

「……」

沈黙が流れる間も、影斗は頭を下げ続けた。

その様子を確認し、猿渡は深くため息をついてから頬杖をついた。

「…顔あげろ。お前の言う通りにしてやるから」

「…え」

「?城本人も、お前と関係を続けたいそうだ。お互い同意しているなら学校側として制限出来る。…?城との交友を認めることにする」

「…まじで!?!」

「我々にとつては大変不本意だが…しかし最近までのお前の素行がいくらかマシになったのは、彼の影響もあるようだな。…そこにも期待しての判断だ」

呆けたような表情が驚きと喜びで徐々に見開かれていく様子を見、猿渡はそれを制するように机を軽くパンパンと叩いた。

「言つとくが手放しにはやらせんからな? こちらの目が逐一入った上で、何か問題が起こつたら即解消だ! 交友は節度を守つて…繁華街に連れてくなんぞもつての外だぞ!!」

「そこはもう、絶対守る。大丈夫!」

「つたく…、くれぐれも同じ過ちを繰り返すなよ。曲がりなりにもお前の方が歳上なんだから、?城をきちんと導いてやるように」

「…了解!」

猿渡から解放され、影斗は指導室から退室する。

そしてその紅潮した顔に満面の笑みを浮かべながら、静かに拳を握りしめた。

それから数日経った放課後、化学準備室に生徒が一人訪れていた。

淹れ方を教わった蒼矢が、鹿野にコーヒーを差し出す。

「良かったね、検査で異常無くて。通院は？」

「もう来なくていいそうです。…本当に、色々とうございしました」

「いやいや、僕は特別なことは何もしてないよ」

「でも、先生からのお口添えが無ければ…今こんな風に穏やかに話せてなかったかもしれません」

「…僕は事実を進言しただけだよ。教員はどうあれ学校としては、なるべく”汚点”を出さない方向に動くだろうと思っただけね」

涼しい顔でコーヒーを一口すすると、鹿野は蒼矢へにやつと笑いかけた。

「それにしても…宮島からの一方的かと思っただけど、君の方もまんざらじゃなかったとはねえ」

「！　そうですね…気にかけて下さってたのは、わかってましたので…」

「相思相愛つてところかな？」

「…先生は人からかうのがお好きなんです」

「ああ、ごめんごめん。君たち見ると初々しいっていうか、若いっていいなあって、羨ましく思っちゃうんだよね」

頬を少し染めながらむつとする蒼矢を見、鹿野はあわてて笑つてとりなす。

「…宮島が君と知り合えて良かったよ。密かにだけど、僕は彼と出会った時から三年間できちんと卒業させてあげたいって目標を立てててね。…君が彼の傍にいてくれれば、きつと出来ると思つてる」

「ご期待に沿えるかわかりませんが…」

「いや、？城はそのままでもいいんだよ、これから先は宮島次第だから。…やれば出来る子だからね！」

「よおつすー」

とそこで、影斗がだるそうな雰囲気をかもしながら遅れて入室してくる。

「お疲れ！ ちゃんと授業出てきたようだね」

「出たよ、聞いてないけど」

やつれたような表情を見せてはいるが、それなりに高校生らしい学校生活を送り始めた影斗に、鹿野は満足そうに頷いていた。

引き続き校則違反であるバイク登校はするものの始業時間には間に合うように来れているし、ネクタイもダルダルだが再び着用してくるようになった。

蒼矢との関係の方はというと、彼の“他生徒との関係も大事にしたい”という意向を受け、今までのように昼休みや放課後にはべつたりという程にはならず、蒼矢は同級

生などの余暇も楽しむようになった。このほどの騒動を受け、在校生徒の間には激震が走ったようだが、以降わりと積極的に他生徒達と交流を図っていった彼を周囲もすんなりと受け入れてしまっていた。また、意外な一面が垣間見えたことで彼へのイメージが変わり、邪な思いを抱いて近付く輩の数も減らしたようで、結果的に安全な高校生活を送れるようになったと言えるかもしれない。

影斗とは、新たに所持するようになったスマホで連絡を取り合い、おおむね彼の満足する水準で交友関係が続けていけているようであった。

影斗が意図的に離れていた時期に蒼矢がお弁当を試作していたことも受け、その後も不定期に作って持ってきて影斗がそれを批評したり、レシピを教えたりするようになった。

影斗としては「料理出来ない蒼矢」でも良かったのだが、彼の健康面を考えた鹿野からの後押しもあり、二つ返事で蒼矢の拙い自炊生活を支えることにした。

一時期はその関係性を危ぶんでいた鹿野だったが、嘘みたいに不安は消え去っていった。

∴教師^僕の出る幕じゃない。放っておいても、彼らなら大丈夫だ。

「マジ疲れたー。蒼矢、慰めてえ」

ややオーバー気味にフラつく影斗は正面に座っていた蒼矢にすがりつこうとしたが、

当の蒼矢はごく自然な所作で立ち上がってかわす。

「すみません、俺用事があるので…そろそろ帰ります」

「…つれねえ」

「忙しいね。誰かしらにまた誘われてるの？」

「あ、いえ…今日はプライベートです。習い事の予約を入れてまして…」

「習い事お!? なんだよ、俺聞いてねえぞ？」

鹿野への返事を受けて影斗に目を剥かれ、蒼矢は上目遣いに見返すと、恥ずかしげに視線を落とした。

「…その…武道を、始めてみようと思つて…」

「はあ？」

「…ああ…」

影斗は間の抜けたような反応をするものの、鹿野はすぐに合点がいったようで、少し身体を縮めている蒼矢に笑顔を向けた。

「いいじゃない、護身術としてなら。そういうのは身に着けておいて損はないからね！」

「…ありがとうございます」

「習うつて、どこでだよ？ お前んちの近くにあつたっけ？」

「ええ。家の最寄駅の線路挟んで反対側に神社があるんですけど、そこで武道を習える

「みたいなんです」

「……!?!」

「へえ、神社で？」

「宮司さんが教えてるらしくて、心身共に鍛えて下さるそうです」

「武闘派宮司さんなんだね。そんなところで教われるなんて、ご利益もありそうだね！」

…どしたの宮島？ 急に黙っちゃって」

「…いや、なんでもねえ。…まあ、やってみればいいんじゃないか」

「はい。では、失礼します」

「あ、待って送ってからです」

「いいですよ、どうせ校門前までじゃないですか…」

「だからこそだろお？ なんならバイクに乗つけてく気満々だぜ？」

「…固く遠慮します」

「じゃな鹿野ちゃん、また明日！」

そう賑やかに準備室を出ていく生徒二人に手を振り、ドアが閉じられると、鹿野は頭
の後ろで手を組みながら椅子に深く寄りかかった。

「…見守るだけの立場ってのも、悪くないかもねえ」

最終話_そして、今。

「——まさかあんたが、教師やめてこんなこと始めるなんざ、あん時は思つてなかつたよな」

バーカウンターに腰かけ、影斗は頬杖をつきながら感慨深げに言葉を漏らす。慣れた手つきでカクテルを作る男が、彼のコメントに振り向き、ニツと笑つてみせた。

「そう？　でもこつちの方がしつくりくるでしょ？」

「まあそうだな…片鱗はあつたよな。しよつちゆう”職員室行きたくない”つて駄々こねてたしな、鹿野ちん」

「ちよつと人聞き悪いよ！　受け持ちクラスの生徒の学力争いとか、出身大学の派閥抗争とか、そういうくだらないことに巻き込まれたくなかつただけですよ」

鹿野はそう吐き出しつつ、影斗の前にグラスを置いた。

「…なんで教師になんてなつたんだよ？　最初つからバー経営ちこっ来てりや良かったじゃん」

「大学の研究室の縁とか、色々事情があつたんだよ。教師もそれなりに楽しかったよ？　君のような、ちよつとはみ出た生徒と触れ合つてゐる時は、特にね」

「そつすか」

「ぶつちやけ、あんまり思い入れがなかったのは確か。ただね、君のことはどうしても卒業させたかったんだよね。なんだろうなあ…当時の僕の目標というか、モチベーションになっちゃってたんだよね」

「それで、俺が卒業した後すぐ辞めたのかよ。…結構ドライなところあるよな鹿野ちんて」「いやいや、一応情はあると思ってるよ？ だから君のことだけは見届けたんじゃない」鹿野が人懐っこい笑顔を向けると、影斗は呆れた風に鼻で息をついた。

「結局僕はきつと、人と話をするのが好きなんだろうねえ」

「だろうな、天職じゃん。良かったな」

「ありがと！ とところでさ、？城はまだなの？ 僕学校辞めてから会ってないから、超楽しみなんだけど！」

「…あー、もう着くつてさ」

かつて化学準備室で見せていたオフの顔となんら変わらない、歳不相応の好奇心に満ちた顔を寄せてくる鹿野を適当にあしらいつつ、影斗は横目でラインを確認する。

「あの頃はこおんな小つちやくて、すつこい可愛かったよねえ。今思えば、君が彼に夢中になってたのもわかる気がするよ」

「おーい、しゃべり過ぎだつて。…あれ、鹿野ちんの記憶どこで止まってるんだっけ？

まあいつか、会えばわかるし」

と、そこでバーの入口が開き、すらりと華奢な青年が入店してきた。

「…すみません、遅くなりました」

「おー、こつち座れ」

影斗に手招きされて近寄ってくるその彼を見、鹿野は口に手を当てながら驚愕の表情を晒していた。

「…もしかして…? 城?!」

「はい。鹿野先生、ご無沙汰しています」

その綺麗なお辞儀をする姿に確信した後、鹿野は顔をそむけ、目頭に手を当てた。

「…こういう成長の仕方は、僕想像してなかったなあ…」

「だいぶ背、伸びたる? 鹿野ちゃんと同じくらいじゃね?」

「そうだね…やっぱり男の子だねえ」

「もうちつと野郎臭くなると思ってたんだけどな。…これはこれで良いだろ?」

「最高」

「先輩、公衆の面前でそういうこと言うのやめて下さい。…先生も乗らないで下さい」

着いて早々好き勝手に評価され、無然とした表情になる蒼矢に、鹿野は笑いながらとりなした。

「ごめんごめん。…ああ、僕はもう先生じゃないからね、ただの鹿野でも、マスターとでも呼んで頂戴ね」

「…じゃあ、鹿野さん何かお勧めのものを下さい」

「君はまだ未成年だったよね、ノンアルコールカクテルでいいかな」

「いいよ有りで。俺送ってくし」

「いえ、頂きません。それと、俺が先輩を送る、の間違いです」

「え、今日は送ってくれんの？」

「店前でタクシーに乗せるところまでは送りますよ」

「…つめてー」

鹿野は、二人のそんなやり取りに黙って耳を傾けながら、カクテルを作り始める。

自分の記憶にある面影から少し成長した二人の姿に、自然と顔がほころんでいた。

…変わらないんだなあ…中身も、仲の良さも。

「宮島が卒業してからもうだいぶ経つけど、君達は変わらず仲良しだね。今もよく会ってるの？」

「！…ええ、まあ」

「最近はずすがに減ったけどなー。俺大学近くに越しちまつてるし」

やや動揺が顔に出る蒼矢の隣で、影斗はカクテルグラスをあおりながら落ち着いた調

子で返答する。

「そうなんだ。あ、？城悪いんだけど、奥の冷蔵庫から氷取ってきてくれるかな？ 悪いね、ここ僕一人でやっててさ。カウンター入って来ちやっていいから」

「あ、はい」

蒼矢が言われた通り奥へ入っていくと、鹿野はやや声を潜めながらカウンター越しに影斗に接近する。

「…進展は無いの？」

「ねえな、さつぱり。あん時と変わんねえよ」

「ええつ、じゃあいわゆるそういう関係にもなつてないし、交わりもないってこと!？」

「ないない。あいつの態度見てりやわかるだろ」

「へえー…四年前の君からは想像つかないね。彼と出会う前は、喰っては捨て喰っては捨てだったのに」

「…そこまでひどかねえだろ…」

「いや、実際ここまで何もしてない君はちよつと違和感あるよ」

鹿野にそう言われ、影斗はゆっくりグラスを傾けると、頬杖をつく。

「…今のが心地良いつてもあるんだよなあ…相変わらず可愛気ねえけど、そこ含めて惚れてるし」

「一途だね。…まあ確かにあれは、新しい扉うっかり開いちゃいそうだなあ」

「だろ？ しかもあいつ、色気もハンパねえからな。気が無い分憎たらしいくらい無防備だし…たまにムラムラ来るぜー、もう大変」

「すごい自制心だね」

「抑えてばかりじゃあ、横からかすめ取られちまうんだけどな…。そんなんで、最近はエンジンかけなきやならねえかなって思い始めてるよ」

「へえ…もしやライバルでも？」

「…さて、どうなるかねえ…」

空けたグラスを鹿野の前に音を立てて置き、影斗はにやりと笑った。

「外野ながら応援してるよ。今日は全部奢ってあげるから、今後も逐一報告宜しくね」

「やりー。おい蒼矢、今日は全部鹿野ちゃんの奢りだつて。じゃんじゃん飲めよ」

丁度戻つて来て鹿野にアイスペールを渡す蒼矢に明るく声をかけると、影斗はテキィラボトルに手を伸ばし、セルフでカクテルを作り始めた。

「そんなに腹に入りませんよ…いいんですか？ 鹿野さん」

「いいよいいよ、もう好きにして！」

「…ヤケになつてませんか？」

「今お前の分も作つてやるからな。えーと、ベースは…」

「あ、ちよつと…酒は駄目ですよ、影斗先輩！」

三年振りに揃って再会した三人の夜が、賑やかに更けていった。

—終—